



なんなん
DAYS

ミュージアム^{であ}で出会う
なんなん?

2025年度 活動記録集

なんなん DAYS ~ミュージアムで出会うなんなん?~
2025年度 活動記録集

目次

002 はじめに

004 ご挨拶

006 目的と概要

008 「めぐる」

015 「つくる」

020 「いろどる」

024 いつでも参加できるプログラム

030 アクセシビリティの取り組み

037 発信・広報の取り組み

039 スタッフ

043 座談会

070 謝辞

はじめに

大原美術館では、2002年より約20年にわたって、家族単位での来館を促し、子どもから保護者世代まで幅広い方々がミュージアムに親しむことを目指した大型ワークショップイベント「チルドレンズ・アート・ミュージアム(以下チルミュ)」を開催してきました。毎年夏の終わり、館内のいたるところで多彩なワークショップが同時に展開されます。そこでは、作品を深く理解するためのプログラムだけでなく、作品を起点に参加者が想像力や創造性を飛ばたかせるための場をつくってきました。子どもから大人までが同じ空間に集い、作品が生まれ、展示室の風景が少しずつ変わっていく。そうした積み重ねは、ミュージアムを単なる鑑賞の場にとどめるのではなく、作品と人、人と人との関わりがどのように生まれ、ミュージアムの中でどのように広がっていくのかを、試しながら考える場として歩んできたように思います。

しかし2020年、新型コロナウイルス感染症の拡大により、大原美術館は136日間の長期臨時休館という異例の事態に直面し、以降チルミュも数年にわたり開催を見送ることになり

ました。「今年はチルミュありますか?」という声は、活動休止という空白の中でも止むことはなく、多くの人たちにとって夏の恒例行事として地域に根付いていたことを物語っていました。

そして2024年、公益財団法人大原美術館は、公益財団法人大原芸術財団へと名称を変更しました。同時に新たに大原芸術研究所を設立し、公益財団法人倉敷考古館との合併を経て、新しい体制のもとで歩み始めました。この節目において、チルミュの歴史を通じて得られたものをどのように受け継いでいくのが課題となりました。その中で私たちは、多くの人々が求めるチルミュをそのまま再開するのではなく、新しいかたちとして再構築することを目指しました。

出発点にあったのは、「ミュージアムは何かを理解しなければならない場所である」という、どこかに広く存在するイメージでした。そのような思い込みが、ミュージアムとの距離を生んでいるのではないかと。もう少し自由に、「なんなんだろう?」という疑問や違和感、驚きなどを他者とのあいだで行き来させていく場をつくること

はできないかと考えました。同時に、ミュージアムは物理的にも心理的にも、まだ少し近づきにくさがあるのではないかという問いもありました。例えば、大原美術館や倉敷考古館は、歴史ある建物であるがゆえに、段差や動線、設備など、簡単には変えられない物理的な制約を抱えています。それでも、その制約の中で工夫を重ねながら、体験のハードルをやわらげることはできないだろうか。「なんなん DAYS」は、そうした問いをミュージアムの中で実際に試しながら考えていく機会でもありました。

例えば、特設サイトでのバリアフリー情報の提示や、階段の利用が難しい方に向けて二階以上の展示室の様子を伝えるパネルの設置などの取り組みを行いました。また、手話通訳や、「やさしい日本語」によるツアーなど、情報へのアクセス方法についても検討しました。これらの取り組みは、誰もが同じ方法で体験することを前提とするのではなく、来館者一人ひとりが自分に合ったかたちでミュージアムを楽しめるように、体験や情報へのアクセスに複数の選択肢を用意する重要性を確かめる試みでもありました。

こうした取り組みは、この2日間で完結するものではありません。「誰もが訪れやすいミュージアムとは？」という問いを、私たち自身が持ち続け、試していくための出発点だと考えています。

チルミュが休止して5年目の2025年11月に開催した「なんなん DAYS」。驚くことに、5年前のチルミュに参加していた子どもたちが、少し成長した姿で遊びに来てくれました。その再会は、彼らの「ずっと、チルミュを待っていた」という期待や喜びを感じる瞬間でした。これからはチルミュを体験した子どもたちが、「なんなん DAYS」で活躍してくれる可能性もあるでしょう。「なんなん DAYS」とともに、私たちのミュージアムがさらにひらかれた場となることを目指していきます。

最後に、本企画の開催及び本書の発行にあたり、ご協力を賜りましたすべての関係者のみなさまに深く感謝申し上げます。

寺元 静香

大原芸術財団 研究員・エドューケーター

ご挨拶



公益財団法人大原芸術財団 代表理事

大原 あかね (おおはら あかね)

11月の晴天の下、多くの方が大原美術館、倉敷考古館を訪れてくださいました。「なんなん DAYS」、多様性という言葉が使われて久しいですが、ミュージアムのあり方を考える時に「多様性」は避けて通れません。なぜなら、ミュージアムは特定の人のためのものではなく、すべての人にひらかれた場でなければならないからです。それは、ICOM の定義を改めて参照するまでもなく、私たち財団が運営する大原美術館、倉敷考古館の歴史をみれば明らかです。そして、私たちがこれから未来を創造するためには、「ねばならない」を超えて多くの方々とともにいることがとても重要です。

そのための一つの道が「なんなん DAYS」です。「ミュージアムはこうでなければならない」という既成概念を軽やかに飛び越えて、その先にある「ミュージアム」を様々な方と探し、創りあげることが目的としています。

2025 年はその第一歩でした。どんな一歩を踏み出したのかがこの記録集から皆さまに伝われば幸いです。そして、いつの日か「あの一歩があったから今があるんだね」と語り合える日が来ることを願っています。

最後になりますが、なんなん DAYS にご協力くださったすべての方に心より感謝申し上げます。



大原美術館 館長

三浦 篤 (みうら あつし)

2025年11月15日朝9時。「ミュージアムって」と私が声を発し、スタッフたち全員が「なんなん?!」と唱和してくれたのをはっきり覚えています。大原美術館と倉敷考古館を舞台にした新たな教育普及事業の始まるの瞬間でした。

ひとりひとりにとってのミュージアムがあり、それぞれのミュージアムへの問いかけがある。年齢や国籍、障害の有無に関わらず、皆自分なりの発見やつながりを持てる場こそがミュージアムなのだ。そんな発想を、秋晴れの2日間に現実のものにできたことをうれしく思っています。

前任者の高階秀爾館長時代に20年間開催された「チルドレンズ・アート・ミュージアム（通称チルミュ）」は、子どもとアートの結びつきに焦点を当てた画期的な試みでした。この「なんなん DAYS」は、「多様性」の時代における老若男女にとって、ミュージアムとの関係性を模索する新しい試みとなることでしょう。もちろん、まだ歩き始めたばかりの「ひよこ」のようなプロジェクトですが、年毎に成長し、立派な親鳥になってくれる、そんな期待を抱いているところです。

最後に、この企画の実現にご尽力下さった関係者の皆さま方に、心より御礼申し上げる次第です。

「なんなん DAYS ～ミュージアムで出会うなんなん?～」

目的と概要

「なんなん DAYS ～ミュージアムで出会うなんなん?～」は、「なんなん?」を合言葉に、大原美術館と倉敷考古館の誕生月である11月に開催した大型ワークショップイベントです。

※「なんなん?」とは、「なんで?」「これは何?」といった疑問の意味を持つ関西圏で使われる方言です。

本企画では、「ミュージアムはなぜ薄暗いの?」「展示室はなぜひんやりするの?」といった、ミュージアムにまつわる素朴な疑問「なんなん?」をテーマに、来館者が自分なりの視点でミュージアムと出会い、楽しむことを目的としました。一方で、大原美術館や倉敷考古館には、歴史ある建物であるがゆえの物理的な課題に加え、「ミュージアムは難しそうでよくわからない」「子どもが騒いでしまうかもしれない」といった心理的なハードルも、来館前に立ち上がっています。こうし



た状況をふまえ、「訪れやすさ」とは何かをあらためて問い直すことも、本事業の重要な目的でした。

そのために、「めぐる」「つくる」「いろどる」の3つのセクションを軸にプログラムを構成し、年齢や来館経験の有無にかかわらず、多様な来館者にひらかれた場として実施しました。

「めぐる」では、ミュージアムにはじめて来館する方にも、この場所がどのような場なのかを知っていただけるよう、わかりやすい言葉や手話通訳を取り入れたツアーなどを行い、ミュージアムへの入口をひらくことを目指しました。

「つくる」では、作品を見て感じたことや気づきをもとに手を動かしながら制作を行い、作品との関わりを体験として深めていくことを大切にしました。「いろどる」では、参加者がつくった作品や言葉がミュージアムの空間に加わることで、その空間がゆるやか



に変化していくような場をつくることを目指しました。その中で、見ることや話すこと、つくることなど、さまざまな関わりが同じ場の中にひらかれていくことを大切にしました。

また本企画では、ミュージアムにまつわる「なんなん?」という問いに応える解説の設置、ゆっくり鑑賞できるラリーシートの配布、託児サービスの実施など、プログラム以外の面からも参加のしやすさを支える工夫を行いました。加えて、スタッフに声をかけやすいよう、目印の設置や、参加者が安心して気持ちを整えられるカーマウンスペースの設置など、安心し



て過ごせる環境の整備にも取り組みました。こうした実践を通して、はじめて来館する方や子ども連れの方、あるいはミュージアムという施設に不安や戸惑いを抱く方などが、それぞれのペースで作品や空間、他者と関われる場を目指しました。同時に、この取り組みを通して、「誰もが安心して訪れるミュージアム」における「誰も」とは誰を指すのか、また「安心して訪れる／過ごせるミュージアム」とはどのようなものなのかについて、職員一人ひとりが考える機会をつくることを目指しました。

「なんなん DAYS ～ミュージアムで出会うなんなん?～」開催概要

日 時：2025年11月15日（土）、16日（日）9：00～17：00

会 場：大原美術館、倉敷考古館

対象者：どなたでも

入館料：一般／2,000円 高校生以下／500円 未就学児／無料

※参加証である「リストバンド」を着用することで、大原美術館および倉敷考古館の両館に入館できる。

※倉敷市内の小・中学生は、「いきいきパスポート」の利用により入館料は無料となる。

主 催：公益財団法人大原芸術財団

めぐる



「めぐる」では、展示室やミュージアムの周辺を実際に歩きながら作品や建築に触れ、「これってなに？」という小さな疑問や気づきに出会うことを大切に、ミュージアムへの入口をひらくことを目指しました。乳幼児連れの保護者や高齢者、在住外国人、情報保障を必要とする方など、さまざまな方に向けたツアーを展開したことが特徴です。

プログラム

- たてものさんぽで健康になろう!
- 赤ちゃんと一緒、ミュージアムツアー
- やさしい日本語ツアー
- 手話通訳付きギャラリーツアー
- 工芸・東洋館のなんなんツアー
- 絵運?! かいうん かいうんが 絵運画みくじ
～気軽に楽しむこの一枚～

※ナビゲーターはすべて公益財団法人大原芸術財団職員

めぐる

たてもものさんぽで健康になろう!

ナビゲーター: 柳沢秀行(シニアアドバイザー)



美観地区内にある大原美術館ゆかりの建築を巡りながら、倉敷の歴史や建築の魅力を多角的に紹介するウォーキングツアーを実施した。運動不足の方や高齢の方でも無理なく参加できるよう行程に配慮し、道中では管理栄養士(財団職員)による栄養学のミニレクチャーも取り入れた。「知的好奇心」と「身体の健康」の両面からアプローチするプログラムとなった。

参加者からは、「60分があっという間だった」「大原美術館を起点に、倉敷

全体の歴史への理解が深まった」といった感想が寄せられ、心身ともに満足度の高いツアーとなった。



実施時間 各日10:00~11:00、14:30~15:30

参加者総数 35人

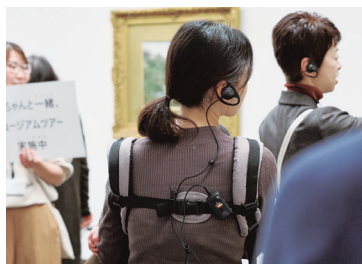
∩ めぐる ∩

赤ちゃんと一緒に、ミュージアムツアー

ナビゲーター: 吉川あゆみ (特命上席研究員)



ベビーカーや抱っこ紐を使用する乳幼児連れの保護者を対象としたツアーを実施した。ツアー中はイヤホンマイクを使用し、途中でお子さまとともに移動した場合でも、離れた場所からツアー内容を聞くことができるよう工夫した。これにより、乳幼児連れの参加者も安心して参加できる環境を整えた。参加者からは、「美術館に1歳児を連れて入ることは想像していなかったので、とても嬉しかった」「多くのサポートがあり、安心して参加できた」といった声が寄せられた。



実施時間 各日11:00~11:45、13:00~13:45

参加者総数 12人

めぐる

やさしい日本語ツアー

ナビゲーター: 長谷川祐里(研究員・学芸員)、 洪性孝(研究員・学芸員)

ツアー監修: 高尾戸美(合同会社マーブルワークショップ代表)



在住外国人の方の参加を想定し、「やさしい日本語」を用いたツアーを実施した。「やさしい日本語」による案内は、在住外国人の方に限らず、小さなお子さまや、ミュージアムに数居の高さを感じている方などにとっても理解しやすく、効果的な手法であることが確認された。当日は在住外国人の方の参加はなかったものの、外国からの観光客の参加があり、解説内容を翻訳アプリを用いて聞き取り、理解している様子が見られた。参加者からは、「外国人のための取り組みだと思っていたが、日本人にとって

もやさしく感じた」といった声も寄せられた。「やさしい日本語」での案内は、幅広い来館者にとって有効であることがうかがえた。



実施時間 各日9:30~10:30、15:00~16:00

参加者総数 29人

/// めぐる ///

手話通訳付きギャラリーツアー

ナビゲーター: 大塚優美(研究員・学芸員)

手話通訳者: 公益社団法人岡山県聴覚障害者福祉協会 岡山県登録手話通訳者



耳の聞こえない、あるいは聞こえづらい方にも楽しんでいただけるように手話通訳を取り入れたツアーを実施した。当日は実際に手話通訳を必要とする方の参加はなかったものの、手話を学んでいる方の参加があり、「手話による表現を知ることができ、理解が深まった」といった声が寄せられた。この取り組みは、情報保障の重要性や、多様な伝え方への理解を広げる機会となった。



実施時間 各日10:00~11:00、14:00~15:00

参加者総数 約100人(途中離脱・途中参加あり)

めぐる

工芸・東洋館のなんなんツアー

ナビゲーター: 塚本貴之(研究員・学芸員)



もともと蔵として利用されていた「工芸・東洋館」の建築や展示作品に触れながら、参加者が「これは何だろう?」という疑問に出会い、解説とともに楽しむツアーを実施した。建築や作品を一方的に説明するのではなく、参加者自身が発見しながら主体的に鑑賞できるプログラムとした。

参加者からは、「空間を見る癖がつきそうで、とても勉強になった」「建物にこれほどの魅力があるとは思っておらず、驚きだった」といった声が寄せられた。



実施時間 各日10:30~11:15、13:00~13:45

参加者総数 34人

めぐる

絵運!? 絵運画みくじ

～気軽に楽しむこの一枚～



大原美術館の絵画作品を対象とした「ラッキーおみくじ」を楽しむプログラムを実施した。おみくじには「今日のあなたのラッキーアート」として、作品にまつわるメッセージが記されており、示された作品を鑑賞するために再入館する参加者の姿も見られた。誰もが気軽に参加できる企画として、来館者から好評を得た。本プログラムの企画・進行およびおみくじの作成は、当財団で活動する高校生・大学生のチーム「ジュニア・アテンダント・スタッフ(以下、ジュニア)」が主体となって行った。おみくじをきっかけに、参加者とジュニアとの間に自然な交流が生まれる様子も見られた。



実施時間 各日9:00~12:00、13:00~16:00

参加者総数 492人

つくる



「つくる」は、作品鑑賞のあとに手を動かして表現する体験を通じて、作品に親しむことを目的としたプログラムです。制作後に再度展示を鑑賞する流れを取り入れることで、見方や感じ方が広がることを期待しました。また、完成した作品を持ち帰ることでミュージアムでの記憶が日常へとつながることを目指しました。

プログラム

- ・みてみて感じる五・七・五
- ・お気に入り、ぎゅっ!バッジ
- ・ぬりえdeプラ板キーホルダーづくり
- ・さわって楽しむドキ土器パズル

∩ つくる ∩

みてみて感じる五・七・五



作品を鑑賞し、自身の感じたことを川柳として表現するプログラムを実施した。はじめに、美術館スタッフが制作した川柳を手がかりに、どの作品を詠んだものかを考えるクイズを行い、楽しみながら鑑賞するきっかけをつくった。完成した川柳は館内通路に展示し、参加者だけでなく、プログラムに参加していない来館者にも鑑賞してもらった機会とした。参加者からは、「絵画を川柳で表現するのが楽しかった」「他の人がどのようにアートを感じたのかを知ることができ、興味深かった」といった声が寄せられた。

実施時間

各日9:00~12:00、13:00~16:00

参加者総数 145人



≪ つくる ≫

お気に入り、ぎゅっ!バッジ



大原美術館が所蔵する絵画作品が印刷されたカード(計6種)の中からお気に入りの一部を選び、切り取ったモチーフをもとに缶バッジを制作するプログラムを実施した。参加者ごとに注目する部分が異なり、同じ作品からでも多様な缶バッジが生まれた。子どもから大人まで

幅広い世代が楽しめ、完成した缶バッジを持ち帰ることができる点も好評であった。

参加者からは、「子どもと一緒に缶バッジを作ったことで、美術館に来たという印象がより強く残ったと思う」といった声が寄せられた。

実施時間 各日9:00~12:00、13:00~16:00

参加者総数 188人

参加費 100円

≪ つくる ≫

ぬりえ de プラ板キーホルダーづくり



児島虎次郎記念館に展示されているオリエントの皿《白地多彩人物草花文皿》を題材に、プラバンクラフトでぬりえを楽しむプログラムを実施した。ぬりえを仕上げた後はオーブントースターで焼成し、キーホルダーとして持ち帰ることができる内容とした。完成後に展示室で作品を鑑賞することで、色の違いや表現の多様さを実感している様子が見られた。参加者の中には、表現を変えて複数回挑戦する姿も見られた。



実施時間 各日9:00~12:00、13:00~16:00

参加者総数 182人

参加費 100円

≪ つくる ≫

さわって楽しむドキ土器パズル



倉敷考古館の土器のレプリカに触れながら、立体パズルに挑戦するプログラムを実施した。平面のパズルとは異なる難しさがある中、土器の模様を手でなぞったり、スタッフのサポートを受けたりしながら、子どもから大人まで多くの参加者が試行錯誤を楽しむ姿が見られた。

実施時間

各日9:00~12:00、13:00~16:00

参加者総数 104人



いろどる



「いろどる」は、参加者の表現によってミュージアムの空間そのものが変化していくことを目指したプログラムです。鑑賞や制作を通して生まれた作品や言葉でミュージアム全体をいろどることによって、来館者同士がゆるやかにつながる場も生み出しました。

プログラム

- いろとかたちの光のロード
- 羽をつかって、○○になる
- なんなんハウス

∩∩ いろどる ∩∩

いろとかたちの光のロード



同時期に開催していた企画展「1925:ピカソ・フジタ・ヤクシジーむすび 100年前」で展示されていたアール・デコ調の作品を鑑賞した後、さまざまな色や形のカラーセロハンを組み合わせ、それぞれの作品を制作するプログラムを実施した。完成した作品は、普段はエレベーターを利用する際にのみ通行される通路に展示し、空間を彩る仕掛けとした。来館者の動線に新たな見どころを生み出す取り組み

実施時間

各日9:30~10:15、10:30~11:15、
11:30~12:15、13:30~14:15、
14:30~15:15、15:30~16:15

参加者総数 69人



∩∩ いろいろ ∩∩

羽をつかって、〇〇になる

講師: ミズカ(アーティスト)



アーティストによるプログラムとして、香川県を拠点に活動するミズカ氏を講師に迎え、ワークショップを実施した。参加者は制作に先立ち、現在長期休館中の分館前芝生広場にある彫刻作品のかたちや素材を鑑賞し、その空間をいろいろることを意識した制作に取り組んだ。制作では、クリアファイルを土台に毛糸やリボンなどの廃材を用いて、世界にひとつだけの「羽」を制作した。完成した作品を身にまとい、芝生広場やミュージ

アム全体を巡る体験とすることで、空間そのものをいろいろる試みとなった。



実施時間

各日9:30~10:30、11:00~12:00、

13:30~14:30、14:30~15:30

参加者総数 81人

∩∩ いろどる ∩∩

なんなんハウス



ミュージアムをめぐり、作品の鑑賞や制作を通して生まれた疑問や気づきを共有する場として、中庭にホワイトボードを設置し、参加者が自由に書き込める「なんなんハウス」を設けた。参加者は同じ形の色紙に、感想や思い、疑問などを書いて貼り出し、互いの声を楽しむことができる仕組みとした。なんなんハウスに集まった言葉を読み、立ち止まって楽しむ来館者の姿も見られた。参加者からは、「多様な人たちが一つの空間と一緒にいて、それぞれがそれぞれの楽しみ方をしていることがよかった」といった声が寄せられた。



実施時間 各日9:00~16:00

参加者総数 109人

いつでも参加できる プログラム

来館者が自分のペースでミュージアムを楽しむために、鑑賞の入口となるプログラムです。特定の時間や参加形式に縛られず、いつでも気軽に参加できることを大切にしました。

プログラム

- 絵探しシート
- フォトスポット
- 特別パネル
- ミュージアムにまつわる「なんなん？」
解説ミニパネル掲示
- 展示を“届ける”ためのパネル掲示

いつでも参加できるプログラム

絵探しシート



大原美術館の展示室に展示されている絵画作品に描かれたさまざまな「手」を探す絵探しシートを作成し、総合受付で自由に手に取れるよう設置した。ツアーや制作プログラムに参加しない来館者や、展示室での過ごし方に迷う方にとって、鑑賞を支えるサポートアイテムとして活用された。参加者からは、「絵探しシートが楽しかった」といった声が多く寄せられた。



絵探しシート(中面)



いつでも参加できるプログラム

フォトスポット



大原美術館に来館した記念として、大型複製画とともに記念撮影ができる「フォトスポット」を設置した。館内での写真撮影を禁止していることもあり、名画と一緒に写真を撮る体験を楽しむ来館者の姿が多く見られた。来館の思い出をかたちに残すきっかけとなる取り組みとなった。

∕∕いつでも参加できるプログラム∕∕

特別パネル

パネル掲示による鑑賞支援の試み



来館者が鑑賞の中で抱く素朴な疑問や、鑑賞上の制約に寄り添う取り組みとして、パネル掲示による情報提供を行った。ミュージアムにまつわる疑問への応答や、物理的な制約により十分な鑑賞が難しい展示内容の紹介を通して、来館者が立ち止まり、知り、感じるきっかけをつくることを目的としている。これらのパネルは、特定のプログラムへの参加を前提とせず、誰もが自分のペースで情報に触れられる点に特徴がある。展示室での鑑賞体験をさりげなく支え、補完する取り組みとして位置づけている。



∕∕ いつでも参加できるプログラム ∕∕

ミュージアムにまつわる「なんなん？」 解説パネル掲示

「なんなん DAYS」の2日間限定で、ミュージアムにまつわる疑問とその答えを記したパネルを館内に掲示した。岡山弁を交えた問いかけに、思わず笑ったり、「言われてみれば気になっていた」と足を止める来館者の姿が多く見られた。参加者アンケートでは、「今更聞けないことが書いてあってありがたい」などといった意見が多数寄せられ

た。また、日頃展示室の監視・警備にあたる職員からも、「普段から問い合わせの多い内容も、『なんなん?』を合言葉にすると、お客様自身で楽しそうに読んで理解されていたので印象的だった」との声があり、来館者とミュージアムをつなぐ取り組みとして有効であることがうかがえた。

このパネル、 なんなん?

「なんなん?」を紹介します

なんなん?は、岡山弁で「これは、なに?」「なんで?」を表す言葉。このパネルでは、みなさんが普段疑問に思っている(であろう)ミュージアムの「なんなん?」や、これを知れば作品をもっと身近に感じる、作品や資料の「なんなん?」情報をご紹介します。

大原美術館と倉敷考古館を巡って、新たな「なんなん?」を発見したら、「なんなんハウス」でみんなに共有しましょう!

パネルは全47種制作。一部を紹介。

なんで こんなに暗いん?

作品のため! その1

絵画や彫物などの作品に使われている絵の具や染料は、強い光に当たると色が落ちていってしまいます。そのため、美術館では、作品を展示する部屋が明るくなりすぎないように、機械で明るさを計って調節しています。

なんで こんなに寒いん?

作品のため! その2

美術品は暑さや寒さに弱いので、展示室は1年中おなじ温度や湿度になるようにしています。だいたい22度くらいになるようにしているので、夏は涼しいですが、冬は少し寒いかもしれません。

いつでも参加できるプログラム

展示を“届ける”ためのパネル掲示

大原美術館の工芸・東洋館および倉敷考古館は、もともと蔵として建てられた建物を改築した展示施設である。その構造や歴史的経緯から、階上の展示室へ上がるためのエレベーター設置が難しく、足の不自由な方にとって階上の展示を鑑賞することが困難であるという課題を、これまで抱えてきた。「なんなん

DAYS」の2日間では、展示されている作品や展示室の様子が伝わるパネルを制作し、階段付近に掲示した。期間限定の取り組みではあったが、今後は日常的な案内として活用できるよう、掲示方法や内容について検討を進めている。



富本憲吉室



東洋館2階

パネルは全5パターン作成。一部を紹介。

アクセシビリティの 取り組み

本企画では、来館者が安心して訪れ、ミュージアムを楽しめる環境づくりを目指して、アクセシビリティについて検討と実施を行いました。館内のバリアフリー情報を特設サイトで提供し、イベント当日は参加証としてリストバンドを導入することで、スムーズな移動と参加を可能にしました。また、託児サービスやカームダウンスペースの設置など、物理的・心理的に安心できる環境づくりにも取り組みました。これらの取り組みにより、はじめて来館する方や子ども連れの方など、さまざまな来館者が自分のペースで過ごせるように配慮しました。一方で、これらの取り組みはまだ十分とは言えず、来館者のニーズをさらに把握し、職員のアクセシビリティに関する学びも継続していく必要性を感じています。

- 安心して楽しむための特設サイト
- 来館者向け配布物の工夫
- 託児サービス
- カームダウンスペース
- カームチェア

∞ アクセシビリティの取り組み ∞

安心して来館するための特設サイト

「なんなんDAYS」特設サイトでは、イベントの概要やプログラム紹介に加え、はじめてミュージアムを訪れる方が安心して来館できるよう、事前に館内でのお約束や楽しみ方がわかる動画を掲載した。さらに困ったときにはスタッフがいることや、カームダウンスペースの設置、館内トイレの場所や通路の傾斜・幅などの情報も掲載し、事前に情報を伝えること

で安心して来館していただけるように工夫した。通路の傾斜・幅などの情報も掲載し、事前情報を伝えることで安心して来館していただけるように工夫した。一方で、実際に特設サイトを閲覧した利用者からの声を十分に把握できていないため、今後は利用者の意見を反映し、さらなる改善を進めていく予定である。

ミュージアムへ行く前に

- 小さなお子さまと一緒に不安な方や、はじめて行く場所で緊張を感じる方などは、是非、ミュージアムへ行く前に「大原美術館の楽しみ方」(動画)をご覧ください。
- 筆談ボードがあります。
- ベビーカーが2台、車いすが3台あります。(無料)
- 介助犬、聴導犬、盲導犬は入館できます。
- 事前に知っておきたい情報などがあれば、大原美術館までお問合せください。

大原美術館を楽しむ動画

鑑賞をするときのお願い

当日は、いつもより展示室に入人が多くて、少しにぎやかになることが予想されます。小さなお子さまと一緒に鑑賞の方は、手をつないで作品をご覧ください。

ミュージアムで困ったら、お近くのスタッフにお知らせください。

- カームダウンスペース(おちつく場所)があります。
- 授乳室や飲水機があります。

事前チラシ

当日パンフレット

展示室でのおやくそく

託児サービスについて

トイレ情報

救護室・授乳室について

バリアフリー情報

カームダウンスペース

館内図

館内図(車椅子通路)

交通アクセスはこちら

なんなん

特設サイトのページ(一部)

∞ アクセシビリティの取り組み ∞

来館者向け配布物の工夫



参加者には総合受付で入館券を参加証となるリストバンドと引き換えて着用していただいた。リストバンドの提示により、イベント各種プログラムへの参加や各館の再入館が自由に行える仕組みとし、利便性の向上に努めた。実際に参加者からは、「子どもを見守るだけで精一杯の中、再入場や移動のたびにチケットを探す必要がなく、とても安心して過ごすことができました」といった声が寄せられ、リストバンドが参加者の安心につながったことがうかがえた。

さらに、はじめて大原美術館を訪れた方には「My First Museum Visit」シールを配布し、ミュージアムをより楽しんでいただく工夫も行った。加えて、今

回はじめての来館者を想定し、子どもから大人まで親しみやすく、読みやすく、手に取りたくなる工夫を施した「おやくそくシート」を作成し、総合受付で配布した。館内での過ごし方やルールの案内として活用され、安心して鑑賞やプログラム参加ができるサポートとなった。





絵さがしシート(左)とおやくそくシート(右)



来場記念のシールを胸元に貼っていただいた

∞ アクセシビリティの取り組み ∞

託児サービス

委託: 株式会社マイスタイル 場所: 新溪園(和室)



アクセシビリティ向上の取組みの一環として、今回、大原芸術財団としてはじめて託児サービスを実施した。15日(土)は午後1組、16日(日)は午前中に2組の利用があり、利用者数は想定より多くはなかったものの、実際にニーズが存在することを確認する機会となった。一方で、託児サービスについては、事前にチラシやホームページ、SNS等で告知を行っていたものの、必要とする来館者に十分に情報が届いておらず、来館後にサービスの存在を知ったという声も聞かれた。今後は、より適切な周知方法や告知のタイミングについて検討し、必要とする人に確実に届く仕組みづくりが課題である。



託児サービスの誘導サイン

∞ アクセシビリティの取り組み ∞

カームダウンスペース

協力: オーエムグループ



「なんなん DAYS」の2日間限定で、オーエムグループの協力を得て、大原美術館本館1階アトリウムに「カームダウンスペース」を設置した。

カームダウンスペースとは、外部の音や視線を遮断し、気持ちが不安定になった際に落ち着くことを目的とした空間である。スペース内には、耳栓やアイマスクを用意し、来館者が必要に応じて利用できるようにした。実際の利用者は多くはなかったものの、来館者やこれから来館する人に対して、ミュージアムの中に安心して過ごせる場所があることを可視化し、伝える機会となった。



∞ アクセシビリティの取り組み ∞

カームチェア

協力: オーエムグループ



「なんなん DAYS」の2日間限定で、オーエムグループの協力を得て、大原美術館本館1階アトリウムに、12歳までのお子さまが利用できる「カームチェア」を設置した。カームチェアは、座ると身体が包み込まれるような感覚を得られ、心を落ち着けて気持ちを切り替えやすくする椅子で、特に自閉症や多動性障害のあるお子さまの落ち着く時間をサポートするために開発されたものである。

会期中、実際にお子さまがカームチェアを利用する場面が見られ、身体が包まれる感覚が心地よかったのか、数十分間その場で過ごし、次のプログラムへと気持ちを切り替える様子が確認された。こうした利用の様子から、今後は当財団が長年実施している教育プログラム等においても、状況に応じた活用を検討していきたい。

発信・広報の取り組み

イベント情報をわかりやすく伝えるために、事前チラシやポスターなどの広報物を作成・配布しました。広報物には、はじめて来館する方でも安心して訪れることができるような情報を盛り込み、親しみやすいイラストをメインビジュアルに用いることで、子どもから大人まで手にとりやすく、楽しさが伝わるデザインとしました。また、従来の配布先に加え、特別支援学校や日本語学校など、普段あまりチラシを届けていない先にも配布し、多様な来館者層への情報発信に努めました。



スタッフ



各種プログラム運営には、大原芸術財団の職員 33 名に加え、日頃よりボランティアに活動している「アテンダント・スタッフ」25 名、高校生・大学生による「ジュニア・アテンダント・スタッフ」11 名、一般公募より募集し、本企画に向けて研修を重ね、当日の運営をサポートした「なんなん DAYS サポート・スタッフ」7 名、ならびにアーティスト等が携わりました。加えて、券売り場の職員や展示室の監視警備職員など、各種プログラムを直接担当しないスタッフも、館内の円滑な運営を担い、イベント全体を支えました。また、イベントの 2 日間は、すべてのスタッフが「なんなん DAYS」のロゴ入りサコッシュを着用しました。これにより、来館者が館内で困ったことや質問がある際に、誰がスタッフであることを一目で認識でき、安心して声をかけられる環境づくりを目指しました。



全スタッフは、本イベントに合わせて特製のサコッシュを着用した。



チケット売り場



受付職員



総合受付へ案内するスタッフ



音声ガイドを貸し出す職員

スタッフの感想

私は幼い頃、チルドレンズ・アート・ミュージアムに毎年参加していました。今回なんなんDAYSのサポート・スタッフに申し込んだのも、その時の楽しかった思い出があり、今度は運営する側を経験したいと思ったからです。当日は名画に関する川柳を作るワークショップに参加し、子どもたちや外国の方を含む、多くの人達と交流できました。もしかしたら、昔の私のように、今回の参加をきっかけにもっと芸術を好きになる人がいるかもしれない。ふとそう思い、人と人を繋ぐ美術館の大切さを改めて感じました。

吉田 大地 (なんなんDAYSサポート・スタッフ)

美術館は静かに鑑賞する場所で、それが苦手な小さい子どもや障害のある方にとっては、もっとも訪れにくい場所の一つだと、これまで思っていました。実は私も美術には苦手意識があったのですが、この企画を通じて、美術館にはさまざまな楽しみ方があることを驚きをもって知りました。「My First Museum Visit」のシールを喜び、制作した作品を身につけてはしゃぐ子どもたちの姿から、美術館は年齢や経験、国籍に関わらず、その人なりの方法で誰もが楽しめる場所なのだと感じました。私自身も、これからはもっと身近に美術館を楽しんでいきたいです。

梶谷 淳子 (なんなんDAYSサポート・スタッフ)

なんなんDAYS初日の朝礼では、このイベントにとっても多くの人が携わっていることを知り、驚きとともに身の引き締まる思いがしました。本番の2日間とそれ

までの準備を通して、美術館職員やアテンダント・スタッフ、アーティストの方などたくさんの方と交流することができ、とても楽しく貴重な経験でした。「羽をつくって、〇〇になる」のワークショップでは、ネコの羽やハートいっぱいの羽などができました。完成後には、子どもたちが芝生を駆けまわったり写真撮影を楽しんだりしていて、いつもより賑やかで色鮮やかな分館前の様子に、彫刻たちも喜んでいるように思えました。

石井 治晃 (大原芸術財団 ジュニア・アテンダント・スタッフ)

私は2日間、児島虎次郎記念館で「ぬりえdeプラ板キーホルダーづくり」のスタッフとして参加しました。来場者の対応をしている中で、耳の聞こえないお客様が来られた際、どのように対応すべきか分からず慌ててしまいました。しかし、ご家族の方が手話で通訳してくださったお陰で、無事に対応することができました。そのお客様が完成品に満足している様子を見て、耳は聞こえなくとも芸術を楽しむことはできるのだと気付かされました。この経験から、誰もが芸術に触れられる環境の大切さを実感しました。

竹島 優美 (大原芸術財団 ジュニア・アテンダント・スタッフ)

誰もが訪れやすいミュージアムを目指して初開催となった「なんなんDAYS」。まずは、法人担当として、実績のない初年度にも関わらず企画の趣旨や私たちの想いに共感し、ご協賛いただいた企業の皆様へ心より感謝申し上げます。

スタッフの感想

当日に企業の社員の方々のご家族で来館され、各プログラムを楽しまれている光景がとても印象的でした。また来年、そして毎年の景色にできるよう、多くの方々と一緒につくっていく、そんなイベントとなるようにしたいです。

岡崎 翔太(大原芸術財団 事業部
マーケティング課 法人チーム)

なんなんDAYS当日は、館内の監視をしていました。来館者は多かったけれど、館内は大きな混乱もなく穏やかで温かい雰囲気だったと思います。子どもの頃に、親戚と大原美術館へ来て《受胎告知》を見て、世の中にこんなきれいなものがあるのかと思い、絵はがきをいところを買ってくれてすごく嬉しかったのを今でも覚えています。学生の頃も、つらい時に、ときどき来ていました。思い出というのは強いものだから、子どもたちや他のみんなにも印象づけられる、なんなんDAYSのような催しがあって良いと思います。来年も館内監視でなんなんDAYSに携わりたいと思います。

石村 泰子(大原芸術財団 監視・警備
スタッフ)

チルミュから引き続き、みてみて感じる五・七・五(以下、五七五)を担当しました。参加者の中には、五七五を楽しみにしてくださっていた方もおられ、とても嬉しく思いました。少し変化させながらも同じ事をやり続けることの意義を感じました。なんなんDAYSは様々な人々を受け入れるイベントだったと思います。子ども向けに加え、座談会でも話題に上がりましたが、大人向けの五七五を復活させるのも良いかもしれません。多様な特

性を持つ来館者を想定し準備することで、さらに幅広い方が楽しめる五七五になるのではないのでしょうか。

若林 敬子(大原芸術財団 アテンダント・スタッフ)

私は工芸・東洋館のなんなんツアーの見守りスタッフとして参加しました。案内役が「この床は何でできているでしょう」と問いかけると、参加者はしばらく足元に視線を落とし、床の色や形、触れたときの質感や歩いたときに響く音まで、じっくりと観察し始めました。やがて何かに気付くたびに小さな声が上がリ、彼らの表情が和らいでいきました。その様子を見ていると、誰かと同じ空間を味わいながら鑑賞することの楽しさが広がっていくように感じられました。

岡野 雅子(大原芸術財団 アテンダント・スタッフ)

自分の心のなかに生まれた「これ、なんなん?」と妥協なく向き合い続ける作者たちの姿が力強く、完成させた羽を生やして弾ける笑顔で飛び立つ背中たちが愛おしくて。そのあまりにも幸せな光景にうっとりしていました。秋晴れ!の言葉がまさにびったりな二日間。スタッフの方々、地域の方々、ボランティアの方々。普段は違う場所でそれぞれの生活を送りながら、このイベントを一丸となって支えてくださる人たちの笑顔と頼もしさ。素敵なお時間に一緒にできたこと、とても光栄に思います。

ミズカ(アーティスト)



座談会

イベントの翌週には、その成果と課題を振り返り、今後の取り組みにどうつなげていくかを考えることを目的に、3名の登壇者を迎え、座談会を開催しました。プログラム設計、来館者視点、鑑賞教育の在り方などについて、イベントでの具体的な実践をもとにさまざまな意見交換を行いました。座談会には、他館の教育普及担当者や関係者など約25名が参加し、実践をふまえた課題共有の場となりました。

- ・日 時:2025年11月24日(月・振替休日)
13:00~16:00
- ・場 所:児島虎次郎記念館(レクチャールーム)
- ・参加者:25名

※本座談会はセッション1・2の2部構成で実施しました。本記録集には、そのうちセッション2の内容を中心に書き起こし・抜粋して掲載しています。



本座談会では、イベントを単発の試みとして終わらせるのではなく、「何がうまくいき、何が十分ではなかったのか」「来館者の体験はどのように受け取られていたのか」といった点を丁寧に振り返り、次の実践に活かす視点を得ることを重視した。登壇者だけでなく参加者からも意見や質問が寄せられ、静寂な展示室とにぎやかな展示室の対比をどのように共存させていくのかといった、展示空間のゾーニングに関する問いを通して、これまでのミュージアムが大切にしてきた価値と、これからのミュージアムに求められる在り方について考える場面も生まれた。

登壇者の選定にあたっては、異なる立場や専門性から意見を得ることで、本イベントの取り組みを多面的に捉えることを意図した。かつて大原美術館で教育普及を担い、現在は国立国際美術館で教育普及に携わる鬼本佳代子氏からは、国立美術館におけるユニバーサ

ルな活動や実践を踏まえた客観的な視点が示された。滋賀県立美術館のアクセシビリティに関する取り組みについて事前ヒアリングに協力いただいた吉川紀子氏からは、アクセシビリティの観点から本イベントの成果と課題について意見を伺った。また、岡山大学 ESD 協働推進センター助教であり、二児の母でもある柴川弘子氏からは、研究者としての視点と来館者としての実体験の双方から、「なんなん DAYS」の意義や今後の可能性が語られた。

本座談会で交わされた意見や気づきは、「なんなん DAYS」を今後どのように育てていくのか、また日常のミュージアム運営や教育普及活動の中で、アクセシビリティや来館者支援をいかに継続・深化させていくのかを考えるうえでの重要な手がかりとなった。今回得られた視点を、次年度以降の企画や館の取り組みに反映していくことを目指したい。

座談会 トークセッション

登壇者



鬼本 佳代子 (おにもと かよこ)

国立国際美術館 学芸課
教育普及室研究員

大阪大学大学院文学研究科修了。西洋美術史専攻。1997年より福岡市美術館に教育普及専門学芸員として勤務し、美術館・博物館教育を専門とし、学校連携、子どもを対象としたプログラム・市民を対象としたワークショップの企画、ボランティアの育成などを行ってきた。2008年から2012年まで大原美術館に勤務。既存の教育プログラムをさらに充実させるとともに、高大生ボランティア「ジュニア・アテンダント」の立ち上げや同館の80周年記念プロジェクトを企画。2012年に再び福岡市美術館に勤務し、未就学児童から高齢者までを対象にさまざまな教育プログラムを手掛け、また、自然史博物館や科学博物館などの異種館との連携などにも力を入れてきた。2023年4月から2025年4月まで姫路市立美術館学芸課長を務め、2025年5月より現職。



吉川 紀子 (よしかわ のりこ)

滋賀県立美術館 学芸課
主任学芸員 エドューケーター

多摩美術大学絵画学科油画専攻を卒業後、東京テキスタイル研究所のこども造形教室で講師をしながら中高一貫校の美術講師を10年ほど務める。2016年より現職。対話鑑賞プログラムの実践や展覧会に関連したワークショップの企画運営、社会的処方を取り組みなどを行なっている。



柴川 弘子 (しばかわ ひろこ)

岡山大学 ESD 協働推進センター 助教

学生時代、直島でのアーティスト通訳を機に現代アートに関心を持つ。高校教員を経て、神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士後期課程修了。ESD・社会教育・生涯学習を専門とし、教育学部でのESD教員養成、学芸員課程「生涯学習社会論」を担当。学校・地域と実践のコミュニティを形成することを研究の軸とする。森美術館「Go-Betweens展」、つなぎ美術館「PLANET HOME」展、株式会社ぬか「なんでそんな大賞」審査、たんぼの家「障害とアートの研究会」伴走など多様な活動に携わる。年齢・障害・背景を越えてアートが社会をひらく力を信じ、ミュージアムを誰もが問い、対話し、創造できる場として捉えている。



寺元 静香 (てらもと しずか)

公益財団法人大原芸術財団
研究員・エデュケーター

都留文科大学卒業後、2013年より大原美術館(現・大原芸術財団)に勤務。未就学児から大学生までを対象とした学校団体の受け入れや鑑賞プログラムの企画・運営に携わるほか、高校生・大学生が主体的に活動するジュニア・アテンダント・スタッフの運営・育成を担当。来館者と作品をつなぐ教育普及事業全般に従事し、対話を重視した鑑賞活動や学びの場づくりに取り組んでいる。

司会 みなさま、本日は公益財団法人大原芸術財団「なんなん DAYS 座談会」にご参加くださり、ありがとうございます。まずは寺元より、各プログラムの紹介をさせていただきます。寺元さんよろしくをお願いします。

寺元 当日のパンフレットを座談会にご参加の皆さんにもお配りしているので、ご覧いただきながら紹介をしていこうと思います。

今回、ミュージアムを『めぐる』、ミュージアムで『つくる』、ミュージアムを『いろどる』、以上3つの体験型プログラムを用意しました。大原美術館では、毎週日曜日に館内で解説ツアーを行っていた時期もありましたが、現在は行っていません。はじめてミュージアムに来た方にとって、大原美術館はどのような美術館なのか、どんな作品があるのかということを知っていただく一つの機会になればと思います。ミュージアムを『めぐる』というプログラムをつくりました。

そして、作品に直接アクセスするような体験ではないのですが、展示室の中では制限や制約が多いこと、さまざまな方が来館されることを踏まえて、外でのびのびとものづくり体験ができる場をつくりたいと考え、中庭などに『つくる』という体験の場を用意しました。

そして最後に『いろどる』。「いろどるって何?」と、プログラムを始める前からさまざまな声がありましたが、ミュージアムという場、空間をいろどることを目指して『いろどる』というプログラムをつくりました。

ここから一つずつの紹介となりますが、まず『めぐる』ではたくさんの方のツアーを準備

しました。

例えば『たてものさんぽで健康になろう!』。一体どんなツアーなんだろう……と思われるかもしれませんが、展示室ではなく、大原美術館ゆかりの建築をめぐる、倉敷の歴史や建築にまつわるお話を幅広く楽しみながら、美観地区をめぐるいただくツアーです。特に運動不足の方や高齢者の方にも無理なくご参加いただけるような内容にしており、ツアーを始める前には、栄養士による栄養学レクチャーも取り入れました。ミュージアムのまわりをめぐることで、歩くことで体力をつくり、人と関わることで社会に参加し、フレイル予防にもつながることを体感できるツアーとして行いました。

次に、『赤ちゃんと一緒に、ミュージアムツアー』。こちらはベビーカーや抱っこ紐を使用するお子様の保護者の方にお楽しみいただけるツアーです。ツアー中はイヤホンマイクを使用して、途中でお子様とその保護者の方が移動した場合でも、離れた場所から内容を聞くことができるように工夫しました。

そして今回はじめて取り組んだ『やさしい日本語ツアー』。在住外国人の方の参加を想定して、大原美術館はどんな美術館なのかをわかりやすい言葉で行うツアーとして『やさしい日本語ツアー』を行いました。監修を合同会社マープルワークショップの高尾さんをお願いして、内容を作り、学芸員が台本を読みながらツアーを行いました。言葉だけでツアーをしていくのではなくて、例えばこちらの写真(p48-①)は棟方志功室でツアーをしている最中なのですが、棟方志功の顔写真やアイテムを用意しました。実際に在住外国人の方

が当日来られていたかという、ほとんどいらっしやなかったと思うんです。ただ、美術館のギャラリートークとかツアーは、前提知識がないとわかりにくい場合も多く、「多分こういうことを言ってるんだろうな」とわからないままついていくこともありますよね。そうしたことがないように、小さなお子様にもわかりやすい言葉でお伝えることを目的として行いました。



在在外国人の方を対象に、館内の案内をわかりやすい言葉で行うツアー「やさしい日本語」によるご案内は、小さなお子様や外国人に対して親しい印象を与えている方々にとって馴染みやすく、効果的なプログラムとなりました。本ツアーの内容監修は、合同会社マールワークショップ代表理事戸島長に依頼しました。

①

『手話通訳付きギャラリーツアー』も行いました。手話通訳を必要とする方に向けて行ったツアーです。ただ、手話通訳を必要としている方よりも、館内をたまたま鑑賞していたお客様が次々と参加し一番人気のツアーになりました。学芸員も普段よりもゆっくり丁寧に伝えることを心掛けていて、いろんな方にとってわかりやすいツアーになっていたのではないかと思います。

そして、少し雰囲気が変わりますが、工芸・東洋館に限った『なんなんツアー』です。もともと蔵として利用されていた工芸・東洋館は、特徴的な建築です。この建物や作品にまつわる「これってなんなん?」という疑問を、解説とともに楽しむツアーです。こちらの写真のように(②)奥の方

を使い、「ここでなんなんポイントです!この床は何でできているのかな?」という問いを投げかけて、建築や作品の「なんなんだろう?」を提案しながら、「確かにこれって何なんだろうね?」ということを楽しむ対話を加えたツアーを行いました。



もともと倉庫として利用されていた「工芸・東洋館」の建築や展示作品に触れながら、参加者が「なんなん?」という疑問に思い、それを解説員が丁寧に答えるツアー。運営「なんなんポイント」を示しながら、参加者との対話も交えたツアーとなりました。

②

そして『めぐる』といってもツアーとはまた違う意味なんですけれども、『絵運(かいうん)』 絵画の『絵』に『運』、開運、開く運にかけている『絵運(かいうん)!? 絵運画(かいうんが) みくじ〜気軽に楽しむこの一枚〜』というおみくじのプログラムもありました。大原美術館の作品を対象にしたラッキーおみくじです。おみくじで示された作品を鑑賞するために「もう一度見に行こう」と展示室をめぐり直す来館者も見られ、どなたでも気軽に楽しめる人気企画となりました。以上が『めぐる』の話です。

司会 寺元さんありがとうございます。ではまず『めぐる』のセクションからです。ご紹介した内容について、登壇者の方実際に見ていただいているので、ご意見とかご指摘があればいただいきたいと思いますが、いかがでしょうか。では鬼本さんから。

鬼本 まず全体について、こういう新し

いことをするのってすごく勇気がいると思うんですね。それをこの大規模なかたちでされたということが、すばらしいな、と。敬意を表したいと思います。

(会場拍手)

チルミュ(チルドレンズ・アート・ミュージアム)が一旦できなくなって、その一旦できなくなったものを新しいかたちで始めるっていうのはすごく難しかったと思います。それを今の社会の流れに従っていろんな人にひらいていく形に仕立て直して、そのテーマもすごく良かったなと思います。その上で、『めぐる』ツアーについては、内容そのものというよりも、寺元さんがおっしゃったように「当事者になかなか届かない」というところは、これからの課題かなと思っています。1回目って届けたいところになかなか届かないんですよ。これは長く続けるしかないので、「届くまで頑張ってください」というのが私からの意見です。

寺元 ありがとうございます。

吉川 私は、全部のツアーをめぐろう!と思って、もう全部、めぐらせていただきました。手話は他でもやっているところかもしれませんが、もしかしたらあるのかなと思うんですが、『やさしい日本語ツアー』は、私ははじめて体験しました。すごくわかりやすく、情報ってちゃんと整理をして伝えると、子どもたちにもすごく伝えることを実感して、本当にいいなと思いました。やさしい日本語とか、わかりやすい日本語の解説(パネル)はうちの館(滋賀県立美術館)でもやったことがあります、言葉で伝えるっていうのはなかなか難しいと思っていたんです。でも、すごくわかりやすく良かったなと私は思いました。

一つ、手話付きの方で、これはその当事者の方に聞いてみたいと思ったことがあるのですが。私もし耳が聞こえづらかったら、どうやってこのツアーを回るんだろう?とあって、ずっと手話の方を見てたんです。そうすると絵を見る時間が取れなくて。ただ、もしかしたら慣れている人はこうやって(手話通訳者と作品を交互に見ることが)できるのか、それともやっぱり時間差があるのか、当事者の方に聞いてみたい。そうすることによってもしかしたら見る時間と話す時間を分けなきゃいけないのかもなと思いました。でも、うちの館もやりたい!って思いました。以上です。

司会・寺元 ありがとうございます。

柴川 実は、これらのツアーに諸事情により全く参加できなかったんです。うちの4歳の娘が、本当に一通りのことを裏切ってくれるタイプで。例えば、育児書やマニュアルには『こういうところに来たら、最初にお約束をしましょう』みたいなこと、お約束をして、こういうイントロをして、声もだんだん小さくしていくとか、色々ありますね。それが効かないんです。あらゆることを試しても、それでも効かなくて、そもそも開始時間に間に合わせる事ができなくて。です、ツアーに参加しての感想ではなく、プログラムの内容を聞いただけですが、私にとってはもう本当にまさにこういうものがあって欲しかったなというものばかりなんです。複数回あって嬉しかったですし、例えば『赤ちゃんと一緒に、ミュージアムツアー』は他の館でもされていることかと思うんですが、これはすごく励みになるというか、自分が今回は参加できなかったとしてもこういうことをしてくれているっていうこと自

体で、心理的なハードルがぐっと下がります。子連れには、ミュージアムって基本的に行っちゃいけないんじゃないかという空気がある。もちろん一概には言えません、一般的には日本って「あまりキッズフレンドリーではない」って言う話を聞くことがありますよね。例えばお隣の韓国やマレーシアとかの方が、子連れにとって住みやすい、過ごしやすいって言われていて、美術館とかもそうだと思うんですけど。そもそもハードルが高い中で、さらに美術館というところが一般的にもハードルが高い。ましてや、子連れにとっては、赤ちゃん連れにとってはハードルがすごく高い場所なのに『赤ちゃんと一緒に、ミュージアムツアー』がある。子育て雑誌やコミュニティ系のペーパーでその文字を見るだけですごくやさしい感じがすると思います。私にとっては、子どもを連れて行くようになってからミュージアムというところが、ふわふわ言葉とチクチク言葉でいうと、どちらかという『チクチク』になっていたんですけど、このプログラムで『ふわふわ』とした印象に変わりました。アウトリーチはまだまだもつとできると思いますし、そういった媒体で発信していただけたらすごく拠り所になるような居場所になるんじゃないかと思いました。

司会 ありがとうございます。追加で言っておきたいことなどございますでしょうか。

寺元 今回、他の美術館の学芸員の方にもこの2日間参加していただいて、メールで感想いただいています。トークだと語尾が曖昧になったり、作品を見ながらだと聞き取りにくいことがあったりすると思います。ギャラリーツアーもトークもラ

イブ感が大事だとその学芸員の方は思われていたようなのですが、『やさしい日本語ツアー』はかなり台本を作って、それを読み上げるものでした。「ゆっくり読み上げてもらう方が聞きやすい、ということにはじめて気づいた」という言葉をいただいたのは、私の中でも「へえ、そうなんだ。」という印象でした。

今回、長谷川さん、洪さんは『やさしい日本語ツアー』を担当してみてどうでしたか？

長谷川 そうですね、こちらとしてはやさしい日本語ということで、アドリブを加えてしまうと意味がなくなる。その場で「ちょっとこれ付け加えよう」と思っても自分ではやさしい日本語に変換できないので、台本というかたちになりました。参加者を見て、お子さんが多い回や、やさしい日本語が必ずしも必要ではない方が参加されている回もあり、そういうところは臨機応変に話の内容を変えても良かったのかなと思いました。それから、実際にやってみて、こども説明したいけど、台本に無いから説明できないといった場面も少しあったので、来年は、実際にめぐりながら台本を考えないといけないと思いました。

洪 長谷川と一緒に、寺元のサポートに入りました洪と申します。『やさしい日本語ツアー』を主に担当しました。手話通訳ツアーも本来、学芸員の話す内容はやさしい日本語だろうとを想定されていた、また手話通訳者もやさしい日本語の方が通訳しやすいだろうといった声もありました。ツアーを検討する段階で、私どもとしてはそれもある程度想定していましたが、手話通訳が必要な方にとって、そ

の通訳を受ける方の鑑賞レベルの想定がまだこちらではできていませんでした。鑑賞する側、つまり手話で鑑賞する方にとってやさしい日本語が必要なのか、手話で鑑賞するけれど美術の素養があるので難しい解説を聞きたい方が多いのかといった、層のレイヤーというものをこちらがまだ把握しきれていない部分がかかなりあると感じました。手話通訳者がいればよいと考えていましたが、さらにその中でもいくつか区分けをしても良いのかなというところはあります。

鬼本 手話を通訳することそのものが、実は私たちが今喋っている日本語を分解したりとか縮めて意識をしないといけないので、本当はやさしい日本語でやる方が手話通訳者は通訳しやすいと言われたことがあります。文章を短く切ってくださいなどですね。やさしい日本語でした方が良かったかもしれないなと思います。

長谷川 今回はツアーごとに対象を決めたかたちだったので、まさか、そこそこを組み合わせた方が良いという発想が我々には無かったかな、と。

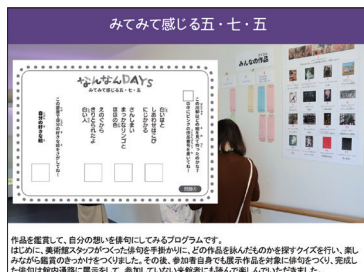
寺元 なのでまさに、やってみて良かったです。

司会 では次に、『つくる』のプログラムをお願いします。

寺元 『つくる』は、大原美術館の展示作品をもとに五・七・五の川柳をついたり、倉敷考古館の土器を見てレプリカのパズルをついたり、作品を鑑賞しながら手を動かして活動するプログラムを展開しました。

『みてみて感じる五・七・五』、これはチルドレンズ・アート・ミュージアムをしていた時からあるプログラムで、アテンダント・

スタッフさんの企画・運営のプログラムです。作品を鑑賞して自分の想いを川柳にしてみるというプログラムですが、はじめに美術館スタッフが作った川柳(③)、「白いはと しあわせはこび にじかかる」と詠んだものを、この川柳がどの作品なのか探すクイズをしました。スタッフに「できたよ」と言って見せて、丸をつけていくのですが、その時、答えが違うことがまれに発生します。ただその時にスタッフが、参加者と「どういうところを見て『白いはと しあわせはこび にじかかる』だと思ったの?」というような対話を必ず行うようにしています。そこで、「あなたはこういう風に見えたんだね、花丸です」と全て丸にするという決まりがあると聞いています。ただ作品を探してクイズを解いて丸をつけるというだけではなく、必ず対話がかかっているというのがこの『みてみて感じる五・七・五』の特徴的なところですよ。このクイズが終わったら、ただ「クイズ終わりました」だけでも良いんですけども、「自分でも五・七・五をつくってみない?」と提案をして、展示室に飾ってある作品をもとに川柳をつくるよう促しています。できあがった作品は通路に飾って、このプログラムに参加していないお客様も、「へー」という風に見られている姿が多かったなと思います。



③

次は、『お気に入り、ぎゅ!バッジ』というプログラムです。セガティニー《アルプスの真昼》や、エル・グレコ《受胎告知》などの作品画像の中から缶バッジにした部分を丸く切ってもらって、お気に入りの部分をぎゅっとバッジにするというプログラムでした。

(鬼本、当日プログラムに参加して作成したバッジを見せる)

寺元 あ、すごい。フォートリエ(作《人質》の図版を使用した缶バッジ)というなかなか渋いところを選んでもらって!

参加者ごとに、注目する点が異なり、同じ作品からでも様々な缶バッジが生まれていました。

ただ、そもそもの紙が小さくて意外と選べる大きさがあっても良いんじゃない?という振り返りもいただいております。ただ、子どもから大人まで楽しみを持ち帰れて、また着用もできるというところが大きな魅力だったと感じています。

『ぬりえ de プラ板キーホルダーづくり』。まさにこの(座談会の会場である)児島虎次郎記念館が舞台のプログラムです。この児島館1階の展示室にオリエントの皿があり、その作品を題材にプラ板クラフトでぬりえを楽しむプログラムです。ぬりえを楽しんだ後は、オーブントースターで焼いてキーホルダーとしてお持ち帰りいただけるという。

結構焼き上がりが良くて、皆さんテンション上がってましたね。実際に自分が塗っ

た作品はどこに展示してあるんだろうと探してみても、「思ったのと全然違う」とか「あ、結構似てる」とか、そういったところも楽しんでもらえたかと思います。

そしてこちら(④)は倉敷考古館のプログラムで『さわって楽しむドキ土器バズル』プログラムです。土器のレプリカに触れながら立体バズルに挑戦する、ととても難しいプログラムです。ここまでが『つくる』プログラムです。

④



司会 ありがとうございます。ではこの『つくる』セクションに対してのご意見などいただければと思います。

鬼本 五・七・五をまだやってるとは、ありがとうございます!ちょうど私が大原美術館にいた時に、アテンダント・スタッフさんと話し合ってたプログラムなんです。何かやっぱり川柳は不変だなという気がしました。で、これは私が忘れていて逆質問なんですけど、川柳のクイズって簡単なものと難しいものと二種類ありませんでしたっけ?

アテンダント・スタッフ 昔ね。でも「一緒にしたらどうですか?」って柳沢さん(公益財団法人大原芸術財団 柳沢秀行シニアアドバイザー)からのアドバイスで、みんな同じ問題のほうが良いんじゃないの?

と言われて。

鬼本 簡単すぎて、もっと難しいのが欲しい!と思ったので。難易度は小さい子向けと、大人がやっても作品を見ないと分かんない!というものがあるのもっと面白いと思います。会話も弾むかな?と思うので。

アテンダント・スタッフ 最初はそうでしたものね。

鬼本 だから「あれ?!一個しかない!」と思って。……よかった、まだ忘れてなかった。

寺元 来年は難易度を分けてみましょう!

鬼本 もう少し付け加えると、つくっている過程でアテンダント・スタッフさんも頭を悩ませて、アテンダントさん同士や担当者と相談し合っ、コミュニケーションを取れるのも楽しい。プログラム自体がブラッシュアップされていくので、そういう段階がある方が良くなって。大変なんですけどね、担当者は。でもその方が多分プログラムとしてもすごく良いし、参加者にとっても良いと思います。

寺元 ありがとうございます。

吉川 そうですね。私、大原美術館に来て、やっぱり倉敷って観光地なので、大人の方がたくさん来ていますね。なんなん DAYSってもっと子どもが多いのかなと思っていたんですが、大人の方も多くて、そうすると難易度が色々あると楽しいのかなと今聞いて思っていました。

私はですね、ものづくりはあまり参加はできていないんです。ツアーの方を全部!と思ってしまったので。ただドキ土器パズルが、ものすごく面白くて、ものすごく喋りながら1人で汗をかきながらやったんです。もしかしたら、やってみないとわか

らないんですけど、視覚障害のある方が一緒にやると、見え方やヒントの出し方が違うのかなと思って、それをチャレンジしてみたいなと思いました。私は目で見てこれが上の方かな、下の方かなというような見方でパズルをしたので余計難しかったです。このピースが上を向いているのか下を向いているのかわからなかったんです。でも、もしかしたら触りながら模様のつづきを探っていけたりしたら面白いかなと思って。もっと広がりそうな感じがしました。

柴川 私も『さわって楽しむドキ土器パズル』を家族4人でしたんです。私が印象に残ってるのは、スタッフの方が、すごくいい声かけをしてくださったんですね。先ほど吉川さんが「視覚障害の方も一緒にやったら」とおっしゃってハツとしたんですけど。その時にスタッフの方が「その模様を触ってみて、つづいてるかどうか」みたいな声かけをくださっていたんです。いろんなヒントがありそうですね。気づきを促してくれるような声かけで。あれはマニュアルがあつてのことですか?

伴 倉敷考古館の伴です。『さわって楽しむドキ土器パズル』は、マニュアルというか、担当者で事前に何回か練習して、お互いに練習し合う中で、どのように声かけをしたらいいのか、時間内に何とか皆さんに完成してもらうために、どんなタイミングで教えない程度の声かけをするのかを、アテンダント・スタッフさんが工夫してくださいました。

柴川 なるほど。

伴 自分たちで工夫して、言いすぎない、構いすぎない。けれど、時間を

見ながら少しした時に「模様を触ってみて」といったことを言う。最初に自分たちでマニュアルをつくっていきました。

柴川 やっぱりそうだったんですね。その声かけがすごく楽しかったし、素敵だと思って見てたんですね。子どものものの見方、見立てを自然に促してくれているんですね。マニュアルがあつてのことなのか、それとも自然に発生しているものなのか、どちらにしてもすごいなと思いました。プログラム自体はすごくシンプルなものでも、その周りにいる人たちの声かけの中に、多文化共生であるとか、様々な立場の人の視点に立つてものを考えたり感じたりすること、他者への想像力を育むことが、自然に含まれているんですね。あるいは、視覚障害のある方が逆に得意なことがあつたりしますよね。そういう視点や要素が活かされていくことで、自然なかたちで障害のある方もそうでない方も交わる場が生まれるのでは、と。そして教育的に見ても、そういった声かけや、ファシリテーションのスキルが、これを続けていく中で育まれていくと、参加した人も、企画する側も、相互作用で育っていくのかな、といったことを感じました。

鬼本 すごく褒め上手でしたよね。

柴川 たくさん褒められましたしね。

吉川 乗せられますよね。

鬼本 「もうちょっと、もうちょっとで出来上がります！」って。もうちょっとなのかな？乗せられていって、それが気持ちいい。

吉川 はい、ちゃんと褒めてもらいました。

寺元 大原美術館の展示作品には、触れる作品がなく、今回触図も作れなかったの、触れる体験については、倉敷

考古館に頼りました。

司会 次は、『いろどる』のワークショップに関して寺元さんお願いします。

寺元 同時期に本館 5・6室で企画展『1925:ピカソ・フジタ・ヤクシジ ― むすび 100年前』をしていました。この展示に合わせて、アールデコのデザインを取り入れた制作物を作って館内を『いろどる』プログラムを展開しました。また分館の芝生広場で彫刻鑑賞をした後に、その広場を『いろどる』。そうしたミュージアム全体をいろどる体験をつくりました。まず『色と形の光のロード』。本館 4室から 5室に行くにはエレベーターか階段を使う必要があります。エレベータを利用しないと通らない通路がありまして、その通路から見える外の景色がとてもすてきで良い空間なのです。この場所をどうにか活かせないかと考えました。ちょうど「1925」展でアールデコ調の作品を展示していたこともあり、カラーセロファンを使った作品をつくり、それを通路の窓に展示して光のロードを作るプログラムを行いました。

はじめに本館 5室で、アールデコ調の作品を対象に対話型鑑賞を行い、その後に本館 4室を制作場として作品を作りました。事前に美術館スタッフがいろんな色のカラーセロファンを複数の形に切ったものを準備しておき、参加者はいろいろな色と形を組み合わせると一つの作品をつくります。さらに、マスキングテープでいりり作品を完成させました。机にしている台形のもの(⑤)、普段は椅子として使っているものです。今回、車椅子の方が来られた場合を話し合った時、画板を机の代わりにしてもらおうと話をしていま

した。実際、車椅子の方が来られたんですけど、通常的車椅子サイズとは違うサイズだったので、A4サイズのバインターをご用意して、保護者の方とスタッフでサポートをしながら作品を作りました。できあがった作品は通路の窓に展示して、色と形の光のロードができました。

⑤



『羽をつくって、〇〇になる』プログラムは、香川県の丸亀を中心に活動されているアーティスト・ミズカさんによるワークショップです。大原美術館は、本館と工芸・東洋館、ここ児島虎次郎記念館のほか、分館という建物があります。分館は長期休館をしているため、長い間展示を見ていただくことができません。この分館の前には芝生の広場があり、彫刻もたくさん展示しているんですけど、分館が閉まっているので、皆さんこの前を通られないんですね。せっかく彫刻作品があるのに誰にも見てもらえないのはすごく寂しいとずっと思っていて、この場をどうにか活用できないかなと思っていました。ある時、その芝生広場の周りをトンボが飛んでいる様子を見て、すてきな羽を背負った人たちがこの場を彫刻のようにポーズをとり、分館前をいろいろと面白いのではないかと思いました。クリアファイル

を自分の好きな羽の形に切って、そこに色々な素材を貼り付けて羽を作ってポーズを取って、その空間をいろいろワークショップを行いました。

そして『なんなんハウス』。これはなんなん DAYS全体の終着点としてつくりました。中庭の真ん中にパネルを設置して、ミュージアムをめぐる中で、わかったことや、もっともっとわからなくなったこと、「これって何なんだろう」と思ったこと、気づいたことなど、疑問を書いて貼ってもらうというプログラムです。この紙の形(⑥)、なぜか、たくさん鳥やあひるのように目やくちばしが描かれていますが、大原芸術財団が開館100周年に向けて掲げている『みんなのマイミュージアム』のロゴマークの形(⑦)をした色紙です。



⑥



⑦

その色紙を、参加者の方がいろいろな角度にして鳥のように表現したりと、不思議

議な光景が生まれていましたね。先ほどの川柳のように、自分がプログラムに参加してなくても、誰かがミュージアムをめぐる中で感じたこと、体験したことに、参加者の制作物を見ることを通して出会う面白さ。そうした面白さを感じられる方も多かったのではないかと思います。

このように本当に鳥が多いな、という印象ですが、中には「〇年ぶりに来ました」や「はじめて来ました」など、いろいろな感想もありました。『いろどる』というプログラムはこの3つでした。

司会 ありがとうございます。では『いろどる』のプログラムに関して、柴川さんから。

柴川 うち、実は『羽をつくって〇〇になる』に夢中になっていました。家の中にアーティスト（※柴川氏の夫は現代美術家の柴川敏之氏）がいるのに、案外そういう制作遊びができてなくて。もっとすると思ったんですけど、全然できてなくて。やはり親が教えるよりも、専門の方と一緒に方がいいと思っていたので、ぜひ参加させてみたいと思いつつ、普段じっとしていない子なので、どこまで集中できるか少し不安でした。それが、うちの4歳の娘が集中して制作をしていた。その姿を見たのがその日一番の驚きでした。これはやはり場の力というか、家庭ではできない非日常的な環境があったからこそだと思います。素敵なスタッフに囲まれて、家では準備できないほどの素材があって遊び放題という環境の中、かつ「何でもいい」でもなく緩やかな枠組みがあったことで、想像力を触発された感じがしたんですね。本当に他のことだとなかなか落ち着いてじっと机に座って遊びつづ

るってことが難しいんですけども、その日はもうずっとこれで、終了時間の1時間が過ぎても、「そのコーナーでまだつくり続けていいよ」と声をかけてくださったんですよ。その配慮がとてもありがたくて、結局1時間半近くいたんじゃないかと思えます。夢中になって制作に取り組む姿を見られたことが本当に嬉しかったですし、家ではできないこの場と時間をもっとあってほしいと思いました。

吉川 柴川さんのご意見は、保護者の方のご意見だと思うんですけど、私も普段「自分の子どもがこんなに集中するんだ」みたいなことをよくワークショップしてる時に言われたりして、それが美術館のいいところだなと思っています。学校にいるときの姿は保護者の方にはみえないので、美術館と一緒にきて、子どもがワークショップに参加している姿を見ると、家とは違う子どもの顔が見えるっていうのがすごくいいなと思いました。あと『色と形の光のロード』の最中もそうですが、他の大人の人が微笑しくそれを見ている状況を見て、なんかいい空間だなというのを私はすごく感じました。羽をつけたままウロウロとみんなが歩いているのも、これきっと大原美術館を出た後もやっているのかなと思うと、写真を撮りたくなるほどすごく可愛くて。それがどんどん広がっている感じがして、私はいいなと思いました。外で作るっていうのもすごいですよね。

柴川 そう、野外でね。開放的でした。走っても良いし。

鬼本 この『いろどる』が一番大変だったんだろうなっていうのが見て取れました。『つくる』というテーマもありますが、『いろどる』の方が実は制作プログラムという

性質が強いですよね。展示室でやるのか屋外でやるのか決めるまでに試行錯誤したのでは……でもすごく頑張ってやったんだっていうのを見ながら思いました。ただ、以前チルミュをやった身としてはちょっと物足りないなっていう気はするんです。だから次はもっと弾けて欲しい。でもとにかくできて良かったなって思います。

寺元 本当に……やっぱりチルミュに囚われていました。囚われちゃって、どうしてもチルミュが抜けない。チルミュじゃないんだって、鬼本さんにも前々から相談に乗ってもらって、「チルミュじゃないんだよ、新しいから大丈夫」と言ってくださっていたんですけど、どうしてもチルミュが抜けないし、やっぱり多くの人がチルミュを望んでいた。チルミュの『正解』を望んでいた中、新しいかたちをするっていうのはかなりドキドキだったんですけど、来年はしっかり弾けたいし、弾けたね!と言ってもらえるように頑張りたいです。

鬼本 とにかくやったということがすばらしいことです。

寺元 ありがとうございます。

司会 『つくる』、『いろどる』、『めぐる』のプログラム以外に実施したことも、寺元さん、ご紹介ください。

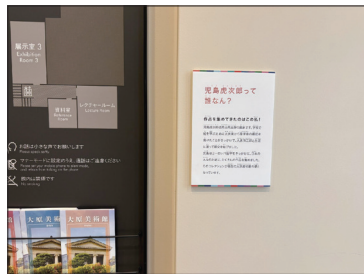
寺元 冒頭にも(※セッション 1で、概要について説明)お話ししました、工芸・東洋館や倉敷考古館の 2階以上の展示を紹介するパネルの他にも、ミュージアムにまつわる疑問に関するミニパネル全 47枚を学芸員が一生懸命作り、各館に掲示しました。『キャンバス』や『油彩画』など、なんとなくそれが何かはわかるけど、説明してと言われたらなかなか難しい……というようなことなど、「実は知りたかつ

た」「言われてみればこれってなんなん?」といったようなミュージアムにまつわるいろいろな「なんなん?」に対するクエスチョンとアンサーをミニパネルにして掲示をしました。これは、とても好評で、参加者からのアンケートでも「ぜひこれを残してほしい」、「残せないんだったら SNS にあげてほしい」などお声がたくさんありました。

工芸・東洋館や倉敷考古館の 2階以上の展示を紹介するパネルについても、なんなん DAYSの 2日間だけではなく、今後大原美術館、倉敷考古館で活用していくために考えていきたいと思っています。

鬼本 「児島虎次郎って誰?」って書いてある……。 (8)

寺元 当たり前には「児島、児島」と言いますが、大原美術館のことを知らない、児島虎次郎のことを知らないという方にとっては「児島虎次郎って誰なんや」ということですね。



(8)

そして『絵探しシート』も制作しました。総合受付で「ご自由にどうぞ」と美術館をめぐる入口の一つとして提案をしていました。今回なんなん DAYSの企画を作っている中で、倉敷市にある『特別支援学級親の会』の方にヒアリングをさせてい

ただ機会がありました。親の会の方々とお話している中で「美術館にどうぞ来てください」「自由に見てください」と言われても、「どう見たらいいのかわからない」という声があり、それは多分、多くの方が思われていることでもあると思うんですよ。例えば、めぐる順番など。「何かスタンプラリー的なものがあるといいね」と言われることがありました。そこで作品に描かれた『手』に注目しながら作品をよりよく鑑賞できるようなワークシートを制作しました。これも好評で、多くの方が参加していただき、アンケートにも「楽しかった」という声が多くありました。確かにこれ(ワークシート)だけ見ると、どの作品なのか職員も結構わからないのです。さらに手だけ注目すると、それがどの作品かわかっても「これは、何してるんだろう?」と。その『手』にいろいろと想像をめぐらすことはすごく面白かったです。

あと『フォトスポット』ですね。名画と写真撮影することは、なかなか無いので。これ、すごく面白かったのが、この写真は(9)見切れているのですが、左側に『フォトスポット』という看板を置いています。



(9)

初日の朝、写真の右側に看板を置きました。こちらの方が、看板の意味としてここ(本館出口の横)がフォトスポットだとわかりやすいと思っていました。すると、多くのお客様が巨大複製画の無い方の壁に向かって、ずっとカメラを向けて写真を撮っていたらしいです。午前中ずっと。工芸館のこの壁が『フォトスポット』だと。スタッフから「みんながここ(本来のフォトスポット)を見ずに、こちらの壁の写真撮ってるよ」と、言われて。物を置く位置の効果ってすごい。すぐに看板の位置を変更したら、フォトスポットの巨大複製画への気づきが起きました。そこに気づいてくださったのは、当財団でボランティアな立場で活動されているアテンダント・スタッフなのです。アテンダントさんは、プログラムのスタッフとして参加するだけではなく、本館の出口や、工芸・東洋館の出口に立っていただき、お客様に「あちらがトイレです」「入口です」などを案内してくださるように当日お願いしていました。アテンダントさんが気づいてくださったので、すぐに看板の位置を変更しました。

あとアンケートに参加していただくオリジナルスタンプを押せるよってという体験のコーナーも設けました。

以上が、その他のプログラムです。

司会 ありがとうございます。ミニパネルの掲示などに気づいていただけましたでしょうか。

吉川 絶対に言おうと思ったのが、私は勝手になんなんキャプションって呼んでました。自館に帰って「めっちゃ面白いのがあった!なんなんキャプションって言うの!」って言ったんだけど、名前が全然違っ

た!勝手に名前つけちゃってた!と今思いました。写真も撮って見返していたら、もちろん作家だったり作品についてだったり印象派についてとか、材料についてもあったんですが、『監視員について』があったんですよ。撮影許可証をもらっていたので、「写真撮っていいですか?」と言って撮らせてもらいました。場所といい、あれは秀逸だったと思います。(10)もうすっごくこれはやりたいと思いました。本当に面白くて最高でした。すいません。先に言っちゃった。どうしてもこれ今日言って帰らないって思ってたから。



(10)

長谷川 あのパネルは、私と洪で作ri、設置しました。やはり学芸員が展示室に座っていると思う方がかなりいて、「解説をしてくれない」とか「作品の値段はいくらくらいか」とか結構尋ねられるので、「学芸員じゃないよ。監視員がここにいます。」というのを言いたかったんです。

寺元 今回、この「なんなん?」という疑問だけじゃなくても、学芸員から「ちょっと知って欲しいんだよね」という内容も、2人がパネルを作ってくれました。

鬼本 キャプションについては、福岡(福岡市美術館勤務)時代、同僚とどうするのがいいのかっていうのを結構議論

していて、「ポエムみたいな解説とかあるけど、あれはやだな」とか、文字数とか、何を伝えるのが大事だなんて話しあったことがあります。それで、リニューアル時に福岡市美術館ではキャプションをかなり変えました。このパネルは残したら本当にいいんじゃないですか?残しましょう。

寺元 最初は「なんなん?」っていうちょっとおちゃらけではないですけど、そういうところから、こういうものなんだよってちょっと結構真面目に答える、その温度感もすごく良かったのかなって思いました。本当に一生懸命頑張ってくれたんですよ。

長谷川 担当としては、やさしい日本語にすべきかこれでいいのか、対象がちょっと難しかったというか。全部をやさ日にした方がいいのかなと思しながら、でも普通に来たお客さんが、職員には聞きづらいし、しっかりした解説は難しいけど、もう少し深く知りたかった時にちょうどいい感じを目指して、今回はこのスタイルにしました。その辺、忌憚なきご意見を聞きたいです。

鬼本 個人的には館の中で話し合っってこういう人たちをターゲットにしようって決めて、その人たちに合わせて作った方がいいと思います。どっちがいいというのは特にないけれど、うちのスタンスはこれですっていう風にした方がいいんじゃないかな。

柴川 やっぱ言葉によって、ミュージアムとの距離感ってすごく変わってくるかなと思います。例えば「なんなん?」って聞かれているのに対して、「○○だよ」と答えが書いてあると、一定の人にとっては先生から教えられているような印象を

受け取って、「もういいわ……」となってしまいかもしれません。今回のパネルはすごくちょうどよくて、きちんと答えてくださっているという印象がありましたので、私はとても心地が良かったです。

吉川 この間大阪の方で鬼本さんが出ていらしかった講演を聞いた時に、やさしい日本語はやっぱりわかりやすく伝えるのにすごくいいツールだと思いました。いろんな人もわかりやすくなるし。だけど伝えなきゃいけないことを伝える時に、果たしてやさしい日本語が本当にいいかどうか。例えばこの文章をやさしい日本語で伝えるとしたら多分倍ぐらいの文章の長さになる。そうすると長い文章を読むのが辛いと思う場合もあって、短くしなきゃいけない。そうすると単語を使っていかなきゃいけない。例えば、ここの部分は中学生でもわかるようにする、ここの部分はこうだよねと話し合いながら、館ごとに今この美術館がどこに発信するかを考えた方がいい。うちも今それを色々考えてるところ、話し合ってるところなんですけど。考えなきゃいけないんだと、今話を聞いていて思いました。

聴講者(春日) ちょっといいですか?あまり掲示物とかキャプション過多になると、見る方が逆に辛くなる。作品にとって障害になることもあると思うので、そこら辺はよく考えていただきたいなと思います。

吉川 3枚あればいいのかと言ったらそうでもないですよ。難しい、中くらい、やさしいっていうのがあればいいわけではないですよ。

聴講者(春日) あまり文字が小さいと年を取った人は見えづらいし、永遠の課

題じゃないかと思うんですけど。どこに置くのかとか、大きさとか。

鬼本 会場の美術館関係者がうんうんって言ったり、ニヤニヤしたりしてますが。

吉川 そうですね。日本美術があるところは暗いから明るいところと同じサイズでいいかって言ったらまたそれも違うし。

本当に、キャプションはすごく難しくて。ずっと同じではいけないんだろうと。10年前ぐらいはあんまりそんな議論がなかったことが今は議論になる。でもそれはすごくいいことだという感じがしています。議論が出てきたってことは、より良くなるものがそこにある。だからそこでまた悩んで、やってみて。もしかしたらすごくパネルばかりになる時があるかもしれないけど、そしたらやっぱりそれ違うんじゃないの、違う方法を考えようみたいな。今、いいなと美術館で働いて思うのはいろんなことがいろんなところからも言われるし、いろんな問題も話題になるから、たくさんの方が議題に上がってくるんですね。それが多分本当にいいことなんだろうなって思います。

聴講者(春日) そう。昔はちょっと権威主義的なところがあって、「キャプションはこうである」みたいな。来館者が文句を言えないような。けど、そこが議論になってきたこと自体が、美術館が結構やわらかく開かれてきて、来館者ニーズに応じたようにという変革を生んできているので、モヤモヤして悩んでいただいて、それでキャプション見させていただいて、お手並み拝見させていただこうかと。

吉川 あはは、こわいこわい。

寺元 大原美術館は、すごく解説が少

ない美術館なのかなって思ったりするんですけど、美術館は少ないところが多いのかな。自然史系の博物館とか大好きでよく行くのですが、キャプションが沢山あって。すごく親切に教えてくれるけど、全部読むのは大変だ!と思っちゃう。

吉川 読めないですよ。

鬼本 それをどう凝縮するかというのが多分自然史系博物館の課題なんだと思う。吉川さんのお話を伺って、やっぱりそれだけ議論になるぐらいちゃんと展示室でみんな来館者のことを見てるんだと思う。それができているか、できていないか、キャプション一つとっても美術館や博物館の姿勢がわかるんだと今話を伺ってて思いました。大原美術館でそれが話題になるってことは、ちゃんとお客さんの方向を向いているんだなっていう風に思います。

寺元 ありがとうございます。

長谷川 ちなみに、キャンバスや画布とかそもそもことからパネルにしたのは、以前、岡山県の本原美術館がやさしい日本語のパネルを出されていて、その時に、例えば『屏風とは何か』、『掛け軸とは何か』という説明をされていたのがきっかけでした。「言われてみればここから分からないよね」という話になって、大原美術館の所蔵品は油彩や画布が多いので、じゃあもう油彩や画布は説明しときましょうとなりました。

司会 では、こういった掲示以外の、スタッフやその他のことに関して、お願いします。

寺元 今回関わったスタッフは、大原芸術財団の職員はもちろん、アテンダント・スタッフという一般のボランティアな立

場のスタッフ、そしてジュニア・アテンダント・スタッフというまさに鬼本さんが立ち上げた制度なんですけれども、高校生・大学生のボランティアなチームです。あと、このなんなん DAYS の2日間のためだけのサポート・スタッフも今回7人の方に参加していただいて、研修を積んでこの2日間と一緒に迎えています。各日約80人スタッフがいます。もちろん、それ以外にも監視業務や入館券売場など、通常運営を担うスタッフも一緒になってこの2日間を運営しました。

(11) 初日の朝礼の様子ですね。三浦館長が皆さんの前で「ミュージアムってなんな〜ん?」って拳をつき上げている瞬間です。



11

三浦館長は以前から、「高階前館長はチルドレンズ・アート・ミュージアムの開催前に『エイエイオー!』と声をかけていた」と多くの職員から聞いており、自分も何かしなければならぬのではないかと悩んでいたそうです。そうした中で出てきたのが、「ミュージアムってなんな〜ん?」という言葉でした。なんなん DAYS 初年度なので、ちょっとテンションもみんなどんな感じなのか、わかんないじゃないですか。でも、これ

もどんどん継承されていくのかなと思います。

そして、参加者の実績について。大原美術館の来館者数は15日は1,203人、16日は1,601人。なんなん DAYSへの参加者数は、15日が174人で16日が192人の方にお越しいただきました。個人的には初日は「すごく少ない!悲しい!届いてなかったかな」と思っていたのですが、16日はなんなん DAYSを目指して来てくださる方の姿も見えて、すごく嬉しかったです。チルドレンズ・アート・ミュージアムの話ばかりになりますが、2019年に最後のチルミュを行い、その時に来てくれていた子どもたちが、この日また来てくれている姿が何人も見られたことがすごく嬉しかったです。アンケートの中でも「チルドレンズ・アート・ミュージアムがなくなって寂しかったけど、またこういう似たようなイベントが復活して嬉しいです」と書いてあったのも嬉しかったです。「似たような」ではなく「さらに楽しいものがあった」と書いてもらえるように頑張りたいと思います。

司会 プログラム以外でも会場の雰囲気や全体を見ていただいて、登壇者の方にも気づいたことなどあればお伺いしたいと思います。

鬼本 私は初日最初のやさしい日本語ツアーに参加した時に、かつてのジュニア・アテンダントが育っていて(※ツアー担当の長谷川は鬼本氏が立ち上げたジュニア・アテンダントの第一期で活動。)ほとんど母の気持ちでした。ジュニア・アテンダント制度がずっと続いているってということにもすごく驚きがあったし、そうやって人が育っていくってことがやっぱり美術館にとっても大事なことだと改めて思

いました。それと同時に参加者に美術館関係者しかいなかったのも、そっちもハラハラしまして。2日目に結構人が来てたっていうのを聞いて、2日目は来る予定じゃなかったんですけど、来てしまいました。来て良かったです。あと、もうちょっとアテンダントさんとかジュニア・アテンダントが活躍できる場があると良かったかなと思います。ただ立ってるとかじゃなくて、もっと能動的に動けるような場所があれば良かったですね。

司会 吉川さんはどうでしょうか。

吉川 私、チルミュを20年やっててコロナで止まって、もう1回スタートするっていうのが本当にすばらしいと思いました。それから、うちはボランティアが一度近代美術館(現:滋賀県立美術館)の休館中に解散をして、新たな組織として40人ぐらいいて、私がボランティア担当なのですが、それ以上増えともう見れないなって思って40人にしてもらってるんです。あれだけの数の方がこの2日間に関わっていたっていうことがすごいなと思って。さらにそれが20年前から始めて、ジュニアのスタッフの人たちがボランティアとして今ここにいらっちゃって、ボランティアさんが活動できる場所としてちゃんとここに物理的にずっとあり続けるのと、加えて人の心に美術館があり続ける。それが本当にすごいなと思います。続けるってすごいと本当に感動しました。

寺元 ありがとうございます。

柴川 最初に言いましたように、バタバタと子ども2人連れて当日参加したのですが、事前にチラシで託児サービスの存在を知っていたにも関わらず、当日になるまですっかり頭から抜けていて。もう少し

目立たせていただけたら良かったかな……と。

寺元 はい。

柴川 大型のイベントで、こういう環境がちゃんと用意されているって、すごく大事なことだと思うんですね。これだけアクセシブルな料金設定で子どもを預けてっていうことは、親にとつてのレスパイト(息抜き)として本当に必要なことだと感じました。親が自分の時間を大切にすることを、社会全体でもっと肯定していっているんじゃないかと思います。私だけでなく、そうした時間をなかなか持てずにいる方は多いはずですよ。これは育児中の親だけの話じゃなくて、障害のある家族の支援や介護をしている方にとつても同じだと思うんですね。

こういった取り組みが社会のスタンダードになっていったらいいなと思いますし、美術館がその一歩になれると思っています。本当に料金面でもアクセシブルで、その上環境も充実していたので、ぜひ広報でもっと前面に打ち出していただけたらと思います。

子連れや介護者が『来ていい場所』にしていくこと自体が、美術館にとつてのUnlearn、つまり、知らず知らず内面化してきた前提を問い直すことなんじゃないかと思っています。それと「なんなん」という言葉も、まさにそのUnlearnと重なるなど感じて、『Unlearn』を提唱したスピヴァクという研究者が問うたように、端的に言えば、自分の権威主義的な知識を一度手放すということなんですよ。美術館にもそういう色彩がどこかにあって、来館者がそれを感じ取ってしまうことってあると思うんです。隠そうとしても滲み出

てしまう。でも、そういう枠組みで物事を考える人ばかりではないですよ。「あなたが代弁できると思うな」という問いかけを、私はいつも自分への戒めにしていきます。「なんなん」という言葉は一見緩やかですが、「これは何?なんで?」という問いかけの中に、歴史的に積み重ねられてきた権威主義的なものを、みんなで問い直し崩していこうとする力があると感じます。意図されていないかもしれませんが、そのような取り組みとして受け取ることができて、「ミュージアムってなんなん?」という問いを積み重ねていくことで、見えてくるものがあるのではないかと思います。

寺元 ありがとうございます。こうやってみんなで肉付けをしてもらえたらと思います。

司会 では、会場の皆様にも、本日の座談会で登壇者の皆様にお話しいただいた内容や、なんなん DAYSに関して、ご感想やご質問などあれば伺いたいと思っています。こちらから指名したいと思うのですが、先ほどご発言をいただいたので、春日さんお願いします。

聴講者(春日) 春日と言います。なんなん DAYSには参加できなかったんですけど、すごく面白いことを大原がされるなど思ったので、座談会だけでも出ようと思って、聞きたくてやって来ました。色々な報告を聞いていると、私が普段やっていることと、いろんなところで人もつながっているし、されることもつながっている。私は、岡山生まれの岡山育ちで母が倉敷の人間だったので、大原美術館は小さな時から来ている美術館で、その美術館でこんな風に先進的な取り組みというか、

ひらかれた取り組みがあるのだなと思いました。私、子どもたちとアート作品を鑑賞するっていう活動をママにやってるのですけれど、子どもたちの直感というか、「それ見てそれ言う？」みたいな、大原美術館でもありますよね。名言が。

寺元 「かえるがいる」（※大原美術館発行「かえるがいる：教育普及活動この10年の歩み（1993-2002）」＜2003年刊行＞の中で紹介される子どもの発言）。

聴講者（春日） 「かえるがいる」というあの名言がある。そういうことが生まれる場所なので、小さな子どもたちから日常として通える場になっていくのが、理想だなと思います。ヨーロッパの美術館なんかももちろん日本よりずっと歴史が古くて、ある意味すごく権威的なところもあるけど、市民にはひらかれていて、すごくうるさくて、こんなうるさくていいの？と思うぐらい賑やかに、いろんな人が会話をしながら作品を見ています。日本も早くそんな風になればいいなと思います。でも、そうすると西洋を倣うことになるから、日本は日本独自の美術館のあり方を模索していきながら、大原がその旗振りをしてくれるといいなと思って。今日聞きながら、いろんな課題はもちろん、あると思うんですけど、タイトルもすごく緩くていいなと思いました。そういう緩い感じで、でも大事なことはきちんとおさえて、みんなが集まれる場所になっていくことを願っています。

司会 ありがとうございます。では続いて亀井さん、お願いできますか？

聴講者（亀井） 私はこの「なんなん？」というのに惹かれて、実際の開催日には参加できなかったんですけど、どうしても

お話を聞きたくて徳島から出てきました。いくつかすごく共感するところとか、本当に頷いて「そう!」と思うことがありました。私は徳島県立近代美術館で10年ちょっと、エデュケーターとして働いていたことがあって、実は2回ほど子どもを預けて大人の人たちが展示を見られる企画をした時に、総崩れで申し込みが本当に少なくなくて。その時に、いろんな方に後から聞くと「日本の社会って、子どもを預けて親が楽しむことに対して厳しいのよ。」と言われたことが、すごく心に残っています。柴川さんが、海外のお話をされていたんですけど（※座談会セクション1）、早くお母さんたちがゆっくり自分の時間を楽しむ、そういう風になることを、まず美術館からモデルケースとして社会に広がっていくといいなと思います。美容室に行くために保育所に子どもを預けると、保育師さんと周りの方から「お母さんお休みなのにどうして子どもと一緒にいないの？」みたいなそういう圧を感じる。

柴川 はい、感じます。

聴講者（亀井） もちろんいい所もあるんですけど、まだまだ当たり前って思っていることを問い直す。本当かな？どうなのかな？っていうのを、まずは子どもから、一緒に来た家族から広がっていくのもっともっと美術館が身近なものになるんだろうなと思いました。今日はいろんな気づきがあって楽しかったです。ありがとうございました。

司会 ありがとうございます。あとは、今日は岡山県立美術館からもお一人いらっしゃっていて、岡本さんは当日もご覧いただいたかと思うんですけども、いかがでしょうか。

聴講者(岡本) 岡山県立美術館の岡本

です。当日はアテンダント・スタッフの方ともたくさんお話をさせていただいて楽しかったです。寺元さんの方から割と早い時期に、このなんなん DAYSの企画のお話を聞いていたので、もう何が何でも2日間実際に自分で見て体験して、そしてその体験を元に皆さんがどんな風に感じられたのか伺えると自分にとって次に繋がるかなと思って、今日臨ませていただいております。たくさん気づきがあったので、いくつかお話をさせていただきます。

途中でキャプションのこととか、やさしい日本語ツアーのお話があったと思うんですけども、私は2日目の午前、洪さんがツアーをされて、長谷川さんがサポートでつかれた時に参加をしました。3組の親子が参加をされていて、未就学児はちょっと集中力がなかったと思うんですが、あとの子どもたちがすごく真剣に洪さんに食いつくようについて行って、「やさしい日本語ツアーってこういうやり方もあるんだなあ」と思いました。脚本があったので大きくは崩されていないというのはわかっていたんですが、多分洪さんは、当日の参加した子どもたちの反応も見ながらスピードとか間とか、あるいはこっちの方へちょっと集まるとか、いい感じにアテンドされていたのでやはり「単なる音声ガイドダンスでも通るんじゃないか」というような考え方もあるかもしれないんですが、そこに人が入ると言うことがすごく重要なんだなっていうことを感じました。と同時に、前日、多分初回だと思うんですけども、鬼本さんが関係者ばかりがいてちょっとヒヤっとしたって言われたところに、知人でやさしい日本語をされてい

る方がいて、その方から情報をいただいたんですが、その方の感想は「やや内容が張っていた感じがある、やさしい日本語ですごく整理はされていたんだけど、ちょっと長い感じがあったかな」というような感想を持たれています。なので、私が思ったのは、やはり対象者によってちょっとずつ変えていく、長さとかも変えていくような、ちょっとしたアレンジがあるといいかなと思いました。また、多分日本語を母語とされていない方が、やさしい日本語ツアーの話をもボイスレコーダーで録音し、翻訳機にかけて聞いていたそうです。

うちでもやさしい日本語を取り組んでいるんですが、やさしい日本語の良さとしては、今日の話の中にもあったんですけども、手話通訳がしやすいと同時に翻訳機にかける時にも非常にクリアに翻訳できるというメリットがあるのだと思います。なので私たちは何がメリットで何がデメリットなのかをよく考えていくとすごくいいかたちで作っていきけるんじゃないかなっていうことをやさしい日本語のツアーから感じました。今日のお話の中で私が一番興味を持ったのが、柴川さんがお話をされた中で(※座談会セクション1)、「インクルージョンよりフレンドリーという言葉の方がいい」と言われた時に、私の中で「これだ!」と思いました。インクルージョンとかインクルーシブってという言葉に、私は違和感を持っています。なぜかという、インクルージョン、インクルーシブって、誰をどこに包摂するの?マジョリティの社会にマイノリティを包摂するってこと?それが多文化共生?というモヤモヤがあって。外国から入ってきた言葉をカタカナにして

割とミュージアムでもいろんなところで使われだしているんだけど、もう一度その言葉の意味を捉え直して、本当に私たちがやりたいと思っているふさわしい言葉を作り出していく必要があるのかなと考えていて、そんな時に今日柴川さんが言われたあのフレンドリーという言葉は「これちょっといいんじゃないのかな」なんてことも思った次第です。

最後に、これだけたくさんの方からいろんなご意見をいただき、そして20年間続いてきたチルミュを一回ある意味解体して新しいことをするってすごく勇気が必要だったと思います。その上ではじめの一步を出されて、謙虚にいろんな方の意見を聞かれて次へ行かれようとしている大原美術館・財団の取り組みが、大原あかねさんが最初のご挨拶をされた時に「伸ばすのか・繋げるのか・待つのか」この3つをキーワードとされて言われたと思います。この3つをキーワードに来年どんな風にされるのかすごく楽しみだなと思っています。楽しみにしています。

司会 ありがとうございます。その他に本日の登壇者の方にご質問はありますでしょうか？

聴講者(吉田) サポート・スタッフで、当日だけボランティアで参加させてもらった吉田と申します。僕自身、幼い頃にチルミュの方に参加させてもらったことがあります。そのご縁もあって今回なんなん DAYSに参加してみたいと思いボランティアに参加してみました。やっぱり美術館っていうところはただ絵を見るだけじゃなくて、地域の人が集まって共同でつくっていく、そういう場所なんだと改めて感じて、すごく感動しました。今後の経

験にも活かしていきたいと感じました。

質問です。美術界全体の動きとして、地域の方がや在留外国人の方などいろんな地域の方が交流していく場所として美術館をつくっていきこうという動きがあると思うんですけど、ただ一方で観光客の方も従来からいらっちゃって、美術館で鑑賞されている。観光客の方とワークショップとかで関わっていく地域の方との間の軋轢じゃないけど、今後そのバランスをどう取っていくのが少し気になりました。例えば、お子さんが美術館の中で声を出して楽しむっていうのはもちろん経験上いいことだと思うんですけど、観光客の中にはじっくり静かに絵を楽しみたいという方もいると思いますし、その辺りのバランスをどう取っていくのか、工夫や課題があれば教えてください。

寺元 ありがとうございます。それは、なんなん DAYSの日に観光客が来た時ということですか？

聴講者(吉田) なんなん DAYSに限らず、今後の美術館業界全体でということですよ。

寺元 なんなん DAYSって結構賑やかな日だったかと思うのですが、大原美術館は日頃から結構賑やかな美術館なんです。それは例えば300人の高校生団体が一斉に入るとかも当たり前であったり、60人の小学生がいろんなところで対話型鑑賞をしていたり、未就学の子どもたちが絵の前でパズルやお話をつくったり、絵を描いたり。結構日頃から賑やかです。観光に限らず、いわゆるワークショップなどに参加されないお客様が来られた時には、やっぱりうるさいと言われる方・思われる方は居て当たり前だと思います。

そうした方々に向けて「今この時間帯は学生団体が入ってプログラムをしています」などお願いの看板を出す工夫をしています。また、観光のお客様でもプログラムに入っただけのようにしています。あえてしていたかと言われるそうではありませんが、実際このなんなん DAYSも県外のお客様が多かったです。何かやってくるから、何かわからないけどワークショップをやってるらしいからこの日に来たよという、いわゆる観光の方もいらしたのかな、とは思います。軋轢……どうですかね。

鬼本 まさにその話を 11月 20日の全国博物館大会でとりあげました。北海道大学の今村信隆さんという方が『「お静かに!」の文化史』と『「お静かに!」の誕生』という本を書かれていて、その方を登壇者の一人にお招きしてディスカッションしました。結論から言うと、今すぐの解決はできない。結局、喋りたい人を包摂すると、静かにしたい人を排除してしまうという、そういう権力構造というのは必ず起こるので。じゃあそれをどうするかっていうのは結局館の中で話したりとか、来館者の人と話したりして徐々に解決していくしかないのではと思います。軋轢が今すごく強くなってるように感じるのは、コロナがあったから顕在化してるんだろうなと思います。今村さんがおっしゃるには、理想としてはそのミュージアムの中に包摂するんじゃなくてミュージアムという灯台にいろんな人が集まってくるっていうかたちになることで解消されるんじゃないかとのことです。私もそうなればいいなと思って、頑張って、努力を続けることだなと思っています。

寺元 逆に私は大原美術館で育っているので、他の美術館に行った時にあまりに静かで、窮屈だと思ってしまって。ヒールで行っているわけじゃないのに自分の足音が鳴ったりすることに緊張を覚えて、それを当時の上司に「他の美術館が静かですごく緊張しました」と伝えたら「いや、大原がうるさすぎるんだよ」と返されたこともある。

鬼本 私は自分が勤めた美術館が、大原もそうだし、福岡もそうだし、あと今の国立国際美術館も実はなんとなくうるさいので、良かったなと思っています。それはやっぱりそれ自体が館の姿勢を表していると思うので。建築の問題もあると思いますが。

一同 そうですよ。

聴講者(春日) でも思うのは、もう『静かにしないといけない』をやめていけばいいんだと思う。監視員さんとかも「シー」って言わないで、観光客が「うるさい」って言ったら、逆にヘッドホンを貸してあげる、静かに見たい人は消音のヘッドホンをつけてくださいって、そっちにいけば良いんじゃないかな。

鬼本 そう、カムダウンスペースっていうのはまさにそうだと思うんですよね。今、せめぎ合ってるところの中で、喋りたいよねっていうのが優勢になっているのかなって思います。

吉川 他の人と話すことでより気づきが出てくる、一人でじっくり見るのもありだけど、そういうのもいいよねってなって、うちの館もどちらかというところで話しをする方向に向かっています。

だから対話鑑賞をやっている、皆喋りながら見てくださいねと言っています。で

もそうすると先程出たようにただただ静かに見たい人だけじゃなくて、本当にうるさいのがダメな人が今までだったら美術館は静かだからゆっくり見ることができたのに、それができなくなっているということもあります。そこが悩ましいです。本当はみんなに楽しんでもらいたいからやるのに。だから滋賀県立美術館では急いで、カームダウンのスペースを、展示室にできるだけ近い、無料で、声をかけなくても行ける場所に作りました。大体一か月に10人ぐらいは使っているようです。本当に使ってるかどうか中身はチェックしてないんですけど、耳栓とかがなくなっているの。そこで落ち着いてから展示を見ていただいたり、こちらも展示室が静かじゃない時は、看板で掲示をしてちゃんと伝えていっています。静かじゃないとしないでという人がいることもしっかり考えておかなければいけないと感じています。

鬼本 こっちも気づいておく。

吉川 そう、知っていないといけないという。やり方は色々議論はあるとは思いますが、そうは思いますね。

鬼本 それで言うところちょっとだけ余談なんですけど、先日の全国博物館大会ではソーシャルインクルージョンとウェルビーイングの分科会であったにも関わらず、参加者の情報保障のことを全く考えてなかったんですよ。前日になって、聴覚障害の方が参加されていると気がついて。登壇者の中に知り合いがいたので、個人的にUDトークに繋いでなんとかしのぎました。本来なら、そういうのもお金払って用意しておかないといけないのにできなかった。だから気づくのは本当に大事です。

聴講者(春日) 手話通訳の話の時に

ちょっと気づいたんですけど。私も今愛媛で手話通訳の必要な方と一緒にアートコミュニケーターの育成をやっているんですけど、手話通訳の方が、美術にある程度、知識というか、一般的なぐらいのものでいいんですけど、持っておく必要があるのかなって。よく尋ねられるんですよ。私が話していることを手話通訳してくださるんですけど、「さっき話されていたことはこういう意味で合ってますか？」みたいなことをよく確認されるので、やっぱりこういうアートの場で手話通訳をされる手話通訳者の方にも、ある程度のレクチャーは事前には必要なのかなと感じることがありました。

長谷川 今回入っていただいた手話通訳の方は、美術が好きで積極的にご自身で事前に調べたという方だったので、結構難しい話も割とスムーズに翻訳してくださったんですけど、やはり知らない方が入ってくるとかなり難しい内容だったと思うので、そこは我々ももっとこういった情報を出したいということを手話通訳の方と綿密に詰めるのが良いと思います。

司会 時間となりましたので、ここで終了いたします。登壇者のみなさま、最後に一言ずつお願いできますか？

鬼本 そうですね、やっぱり前例に捉われず、でも前にあったことも尊重しつつ、かつ続けて欲しいと思います。

吉川 長いこと知ってる人(鬼本さん)と全く知らない私が一緒にいますが、私としては本当に続けてきたことのすごさを感じて、それを新たに変革していこうとしているのも、その場所に私も関わったことも嬉しいです。なんなん DAYSの当日もそうですけど、今日もいろんな人の話を

聞けたことですごくエネルギーが多くて、私も滋養で頑張ります。今後も情報交換をぜひさせてもらえたらと思います。

柴川 研究の立場から申し上げると、なかなか本当にいい取り組みで目立たないものですよ。こんな風に、もちろん地味ということはないんですけど、ずっと続けられてきて、たくさんのお話を聞いています。例えば幼い頃にチルミュに参加していた方が、大人になってそこでボランティアとして参加している。他にも数えきれないほどのストーリーがあると思います。そうしたストーリーを集めて発信していくのも良い。社会にとってミュージアムの取り組みがどういう価値を持っているのかを、これからの時代だからこそ、数値ではなくどんな価値を生み出してきたか、どんな人が育っているのかということをもっと発信していく必要があると思います。ただ、それは内部の方だけではなかなか難しいことかと思うので、こうした調査研究を外からおこなっていただく方と繋がり、社会教育の分野でもまだまだ美術館の取り組みについての研究が決して盛んとは言えない状況かもしれませんが、学術的な文脈にも乗せながら、しっかり残していく。何が残ってきたのか、何が成果だったのかを聞いていくことで、新しい価値も生まれていくんじゃないかと思いました。

司会 ありがとうございます。

寺元 皆さん今日は本当にありがとうございました。先生方からたくさん励みとなるお言葉をいただきました。本当に、大原芸術財団、大原美術館、倉敷考古館が今までいろんなことに挑戦してきたんだという、その土壌があった。私たち、今

活躍している職員たちはそこにラッキーなことに乗っかっている。なので、その土壌を堅実に守りながら、どう今の時代、これからの時代に合わせて展開していかれるかなという挑戦を、これからも頑張って続けていきたいと思っています。今日皆さんから頂いた言葉であったり、今日お集まりいただいた皆さんの眼差しであったり、そういったことを大切にしながらまた次年度、その次へと挑戦していきたいので皆さん今後ともぜひよろしく願っています。

謝辞

本企画の開催および本書籍の発行にあたり、
多くの皆様にご協力を賜りました。
お名前を記すことを差し控えさせていただいたご協力者の皆様にも、
同じく、心より御礼を申し上げます。

岡山県国際交流センター

岡山県立岡山聾学校

公益財団法人岡山聴覚障害者福祉協会

公益財団法人橋本財団

倉敷市立倉敷西小学校

倉敷市立特別支援学校

倉敷市特別支援学級親の会

株式会社マイスタイル

認定 NPO 法人 ベアレント・サポートすてっぷ

ミズカ（アーティスト）

鬼本佳代子（国立国際美術館 学芸課・教育普及室研究員）

吉川紀子（滋賀県立美術館 学芸課・主任学芸員 エducator）

柴川弘子（岡山大学 ESD 協働推進センター 助教）

高尾戸美（合同マール株式会社）

一般社団法人はれとこ

（以上、順不同・敬称略）

《 協賛 》

エヴァホール

 オ-エム

あなただ、わたしで。

OKAYAMA TOYOTA

うさぎや

 SANWA
SUPPLY

 千田組
SENDAGUMI

 高砂熱学
Takasego Thermal Engineering

 Fujiwara

 双葉電機

 Rebelle 両備グループ

 ONE GROUP

《 協力 》

 オ-エム

《 後援 》

大原美術館後援会

OHARA+

倉敷市教育委員会

《 助成 》



公益財団法人
福武教育文化振興財団

本書は、「なんなん DAYS ～ミュージアムで出会うなんなん?～」の記録集として刊行されました。

「なんなん DAYS ～ミュージアムで出会うなんなん?～」 2025年度 活動記録集

編集 寺元 静香（研究員・エドューケーター）
孝岡 睦子、伴 祐子、長谷川 祐里、洪 性孝、服部 素子、佐々木 梢
イラスト ミヤザキ
デザイン アジサカ・カネミツ（有限会社SKKY）、岡田 尚子
写真 河島 夏希（p6～9,10～14,16～19,21～23,25～27,32～36,38～40）、佐々木 敏行（p43～46）

This book was published as an activity report of Nan-Nan Days: Finding the "What's That?" at the Museum.

Editors Shizuka Teramoto (Educator)

Chikako Takaoka, Yuko Ban, Yuri Hasegawa, Sonhyo Hon, Motoko Hattori, Kodue Sasaki

Illustrations Miyazaki

Design Ajisaka Kanemitsu (SKKY Co., Ltd.), Takako Okada

Photography Natsuki Kawashima (p6-9,10-14,16-19,21-23,25-27,32-36,38-40), Toshiyuki Sasaki (p43-46)

発行日 2026年3月31日 発行
発行 公益財団法人大原芸術財団
岡山県倉敷市中央1-1-15 電話：086-422-0005
印刷 株式会社中野コロタイプ
岡山県岡山市北区玉柏390


©2025 Ohara Art Foundation

本書の全部または一部を無断にて転載・複製することを著作権法上での例外を除き禁じます。

※本書掲載の肩書等は、イベント開催時のものです。

ISBN 978-4-9913556-7-7

本書は公益財団法人鹿島美術財団の助成により制作・発行いたしました。

The background is white with scattered yellow brushstroke patterns. These strokes vary in shape, including straight lines, curves, and small circles, all rendered in a soft, painterly style.

公益財団法人

大原芸術財団